

横浜ユーラシア文化館紀要
**Bulletin of
the Yokohama Museum of
EurAsian Cultures**

No. 13, 2025



横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures

横浜ユーラシア文化館紀要 第13号
Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 13

目次
Contents

〈論文〉

玉璣の編年	1
	坂川幸祐

A Chronological Study of Chinese Jade Scabbard Slides (Wei)	Kosuke Sakagawa
---	-----------------

〈報告〉

絵本と実物資料を組み合わせた展示手法	
－企画展「ゲルと草原の物語－絵本原画と生活道具」実施報告	29
	竹田多麻子

Combining Picture Books and Museum Objects:	
A Report on the Special Exhibition “Tales of Mongolian Ger and Grasslands”	Tamako Takeda

〈調査報告〉

ブハラ・オアシス出土ガラスの調査報告	43
	竹田多麻子・細川貴子

A Report on the Investigation of Glass Artifacts Excavated from the Oasis of Bukhara	Tamako Takeda & Takako Hosokawa
--	---------------------------------

玉璫の編年

坂川 幸祐*

はじめに

長剣は、漢代中国の文化を代表する考古遺物の一つといえよう。中国社会において長剣は秦代以降官民間問わず広く用いられた近接戦闘武器であり〔柿沼2011〕、河西漢簡にも大刀とともに長剣を携行した通行人の記述が数多く記録されている。漢代の墳墓からも数多くの鉄製長剣が出土しており、その普及度を測り知ることができる。そして漢代の長剣は当該期の中国領外にも搬出されたことが確認されており、その影響を受けた長剣やそれを描いた絵画が、ユーラシアの広い範囲から報告されている〔Trousdale 1975〕。この長剣拡散のプロセスを把握することは、前1千年紀末以降の汎ユーラシア的な交流とその影響を評価する上で重要な課題である。

しかし、漢代の長剣そのものの型式編年は難しい。鉄製長剣は多くの場合錆に覆われており、最も形態的特徴を観察しやすい関も別素材の剣格に隠されてしまっていることがほとんどで、有効な属性が長さに限られる。また剣装具のうち、柄頭の剣首と鞘尻の玃は長剣副葬時に取り外すことが多く、長剣の年代を決める要素としては難がある。取り外すことのない剣格は、青銅製の事例は変化に乏しく、玉製の事例は出土数がわずかである。

そのようななかで注目すべきなのが玉璫である。玉璫は長剣鞘の中段に取り付けられる帯取用の装具であり、すべての漢代長剣に伴うわけではないものの、剣首や玃と比べて圧倒的に出土数が多い。また単独で出土する事例もあるものの、有機質の鞘が劣化した鉄製長剣との対応関係を確認しやすい事例がほとんどである。何よりも、以下に述べるように編

年に有意と考えられる属性が豊富である。中国境外の長剣との関係を探る上でも、璫は重要な指標となるだろう。

本稿ではそのような玉璫の編年について、発掘出土事例の属性分析をもとに編年を試行する。これにより、漢代鉄製長剣について、より詳細な製作・流通状況を把握することができるようになるだろう。

1. 研究の現状と課題

数ある漢代玉器のなかにあつて、璫の使用方法に関する復元的研究は長い研究史がある〔呂1092、郭1932、朝鮮総督府編1927、梅原1938、林1973、Trousdale 1975、孫機1985〕。ただしそのなかでは璫そのものが編年研究の対象となることは少なかった。中国では、陝西省の玉器集成図録の中で璫が取り上げられている〔劉編著2009〕のをはじめ、玉器全体の集成研究のなかで玉器が取り上げられていることが多い。そこでは紋様の種類や彫刻技術に焦点があてられており、璫そのものの基礎的な分類研究はおこなわれていない。

このような状況下で璫の網羅的な研究をおこなった労作として、トゥルスデイルの集成研究が挙げられる〔Trousdale 1975〕。彼は当時知られていたコレクション資料や発掘出土資料を博搜し、紋様による系列を設定、戦国時代から後漢時代に至る各時期の璫について、各種紋様と側面形の組成を把握することによってその変遷を試みた。そのうえで中国国外の璫や関係資料についても集成と様相把握を試みたため、中国だけではなく後述するロシア・ヴォルガナ墳墓の研究〔Gonthier, Kostov, Strack

*SAKAGAWA Kosuke 島根大学法文学部講師

2014] など、広い範囲で今日まで引用されている。

しかしトゥルースデイルの研究が刊行された1975年以降、中国では漢代墳墓の発掘報告がそれまでとは比べ物にならないほどに増加している。トゥルースデイルは各段階の資料の不足を埋めるためにコレクション資料を引用しており、現在の豊富な出土資料を用いた再検討が必要であろう。また、トゥルースデイルの編年研究では、各種紋様についていくつかの分類がおこなわれているものの、紋様同士の派生関係や、側面図にみられる各種属性の前後関係が検討されていない。したがって、各事例同士の関係が判然としないままになっている。

本稿ではこれを踏まえ、発掘調査によって報告された玉璫を集成し、それについて紋様や各部位の分類による属性分析をおこなう。そのうえで各属性間の派生関係を検討し、総体的な玉璫の編年を確立する。なお、遺跡から出土する璫は軟玉製のほか、水晶製やメノウ製、ガラス製、そして木製や象牙製などが知られている。そのなかで大多数を占めるのは軟玉製をはじめとする、硬質素材を彫刻して作られるものであり、これらの製品は素材が異なっているにもかかわらず製作技法が通底していると考えられる。したがって本稿ではそのほかの素材の製品も視野にいれつつも、主に軟玉製、メノウ製、水晶製の製品を取り扱う。

2. 玉璫の属性分析

ここでは、玉璫の形態と紋様をそれぞれ分類し、その変遷について分析する。トゥルースデイルが指摘するように、玉璫には鈕孔から長い鉤部が一方方向に伸びるものと、短い鉤部が前後に伸びる鉤部を伴わないものがある。このうち前者を甲類（トゥルースデイル分類 Form I）、後者を乙類（トゥルースデイル分類 Form II）とする。以下、玉璫の形態に関する分類項目は図1を参照されたい。

2-1. 玉璫の形態的分析

甲類については、短鉤部と長鉤部の形態が多様性に富み、編年研究に有効であることが予想される。短鉤部、長鉤部の形態は、それぞれ以下のように分類される。

○短鉤部

0形：短鉤部が発達せず、表面から鈕孔部にかけて施文面が連続する。

1形：短鉤部が短くのびる。端部は半月形を呈し、短鉤部表面と裏面が角をなす。

2形：短鉤部が短くのびる。端部にかけて厚みが減じてゆくが、短鉤部表面と裏面は角をなさず、端面を形成する。

3形：短鉤部がやや長くのびる。短鉤部の表面と裏面は平行になり、端部で大きな蒲鉾形の突起を形成する。

4形：短鉤部がやや長くのびる。短鉤部の表面と裏面は平行になり、端部は斜めに面取りする。端面の下端にわずかな突起を形成する。

5形：短鉤部がやや長くのびる。端部にかけて厚みがわずかに増してゆき、端部はやや斜めに面取りする。

6形：短鉤部がやや長くのびる。端部付近で巻き込みながら厚みを減じる。

7形：短鉤部がやや長くのびる。厚みを保ちながら端部付近で巻き込む。

8形：短鉤部がやや長くのびる。端部付近で裏面に小さな巻き込み状ないし瘤状の突起を形成する。

○長鉤部

n形：長鉤部が短くのびる。端部は半月形を呈し、長鉤部表面と裏面が角をなす。

i形：長鉤部が長く下垂するようにのびる。下端にかえしはともなわない。

ii形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端に大きなかえしを形成する。かえしの端面は水平になる。

iii形：長鉤部が長く水平にのびる。長鉤部の表面と

表 1 本稿が対象とする王璵一覧

No.	出土遺構	長鈎	短鈎	断面	形態	紋様大別	紋様小別	年代	備考	参考文献
1	侯馬西郭東周祭祀遺址	n	0		甲	卷蟬		0	春秋後期	山西省文物考古研究所侯馬工作站 2003
2	大原晋国趙卿墓	n	0		甲	卷蟬		0	春秋後期	山西省考古研究所ほか 1996
3	陝東後川村 2040 号墓	n	0		甲	卷蟬?		0	長鈎部を別づくりにして接合	中国社会科学院考古研究所編著 1994
4	洛陽中州路 2717 号墓	n	0		甲	卷蟬		0	戰国時代	中国科学院考古研究所編著 1959a
5	洛陽唐宮路小字 C1M5560	i	0		甲	卷蟬		0	戰国時代	洛陽市文物工作隊 2004
6	長沙楚墓 167 号墓	n	0		甲	卷蟬		0	戰国中期	湖南省博物館ほか 2000
7	長沙楚墓 1065 号墓	ii	1		甲	縱縐	2?	0	戰国後期	湖南省博物館ほか 2000
8	世家皇城 189 号墓	i	1		甲	斜向	2	0	秦代	西安市文物保護考古所 2004
9	白鶴洲 60 号墓	不明	1		甲	斜向	2	0	報告書に依拠。戰国末から秦	廈門大学歴史与文化遺産学院ほか 2022
10	白鶴洲 585 号墓				乙-1	斜向?	2	0	戰国中期	安徽省文物考古研究所・六安市文物管理局 2012
11	潜山彭嶺 26 号墓	不明	4		甲	縱縐	2?	1	方孔がない特殊例（明器?）	安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006
12	潜山彭嶺 28 号墓	不明	不明		甲	縱縐	1	1	側面不明	安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006
13	徐州劉執墓	i	1		甲	斜向	1	1	蟬紋	徐州博物館 1997
14	徐州劉執墓	i	1		甲	特殊例		1	縦紋に近い	徐州博物館 1997
15	獅子山漢墓	i	6		甲	蟬紋	1	1	特殊な平面形をとる。劉鄩（峇）墓か?	中国国家博物館・徐州博物館編 2005
16	孔家坡 8 号墓	iii	3		甲	斜向	1?	1	木剣に伴う	湖南省文物考古研究所・随州市考古隊 2006
17	蕭皇漢墓 XPM100	不明	5?		甲	縱縐	1	1	破損	安徽省文物考古研究所・安徽省蕭縣博物館編 2008
18	西安北郊長慶油田総部三期工程 31 号墓				乙-2	縱縐	2	1	棟相不明、図録に依拠	劉編著 2009
19	西安北郊頂蓋生活園 71 号墓	i	1		甲	縱縐	1	1	棟相不明、図録に依拠	劉編著 2009
20	漢高祖長陵陪葬墓 96 号墓	i	5		甲	斜向	3	1	棟相不明、図録に依拠	劉編著 2009
21	渭城底張湾漢墓	ii	5		甲	縱縐	2	1	棟相不明、図録に依拠、破損	劉編著 2009
22	渭城底張湾漢墓	ii	6		甲	縱縐	3	1	棟相不明、図録に依拠	劉編著 2009
23	馬王堆 3 号墳				乙-1	無紋		1	象牙製	湖南省博物館・湖南省文物考古研究所編著 2004
24	石匣子 68 号墓	i	1		甲	無紋		1	報告書に依拠	重慶師範大学歴史と社会学院ほか 2014
25	胡家草場墓地 12 号墓	iii	5		甲	縱縐	2	1	報告書に依拠、文帝期?	荆州市博物館 2020
26	火電廠 21 号墓	不明	6		甲	不明		1?	弦紋鏡が共存しているが断面図不明	三門峽市文物工作隊 1996
27	成都東北郊西漢墓群 30 号墓	ii	5		甲	斜向	1	1?	雷地紋鏡や桃氏剣などを伴う	頼 1981
28	後樓山西漢墓	ii	1		甲	斜向	1	1?		徐州博物館 1993
29	衡陽市第四類	vi	6		甲	縱縐		1~2		衡陽市博物館 1984
30	陝東後川村 300 号墓	i	1		甲	無紋		1~2	半面で判断	中国社会科学院考古研究所編著 1994
31	連志村 13 号墓	ii	5		甲	蟬紋	1	1~2	半面錢から判断	中国社会科学院考古所唐城隊 1991
32	広州漢墓 1068 号墓	i	2		甲	縱縐	1?	1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
33	広州漢墓 1095 号墓	ii	6		甲	無紋		1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
34	広州漢墓 1095 号墓	i	5?		甲	蟬紋?		1~2	破損しているため紋様の詳細不明	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
35	広州漢墓 1100 号墓	i	1		甲	斜向	1	1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
36	広州漢墓 1103 号墓	ii	6		甲	縱縐	1	1~2	拓本が悪く紋様不鮮明	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
37	広州漢墓 1175 号墓	ii	6		甲	縱縐	2	2	草葉紋鏡	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
38	広州漢墓 1175 号墓				乙-2	特殊例		2	断面以外の紋様不明。雲紋の走りか?	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
39	広州漢墓 1175 号墓	iii	5		甲	斜向	1	2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
40	広州漢墓 1175 号墓	ii	4		甲	縱縐	2	2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
41	東陽小壩山 1 号墓	iv?	2		甲	斜向	4	2		肝胎県博物館 2004
42	荆寺二村 1 号墓	vi	不明		甲	斜向	2	2	半面と鏡から判断	西安市文物保護考古所 2009
43	双乳山 1 号墓	ii	7		甲	縱縐	2	2	前 87?	王 2005
44	双乳山 1 号墓	i	6		甲	斜向	1	2	前 87?	王 2005
45	双乳山 1 号墓	iv	6		甲	縱縐	3	2	前 87?	王 2005
46	南越王墓主棺	ii	6		甲	特殊例		2	狼などを浮彫で表現	広州市文物管理委员会ほか編著 1991
47	南越王墓西耳	ii	6		甲	縱縐	3	2		広州市文物管理委员会ほか編著 1991
48	南越王墓西耳	v	6		甲	蟬紋	1	2	線刻で表現	広州市文物管理委员会ほか編著 1991
49	南越王墓西耳	v	2		甲	縱縐	2	2		広州市文物管理委员会ほか編著 1991

50	牛王廟128号墓					ii	6		甲	斜向	1	2	写真と図面の紋様が異なる	南陽市文物考古研究所編著 2011
51	溝成漢墓1号墓					ii	6		甲	斜向	3	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
52	溝成漢墓1号墓					ii	6		甲	縦横	1	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
53	溝成漢墓1号墓					ii	4		甲	縦横	1	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
54	草林山11号墓					v	6		甲	縦横	1	2		黄陂市博物館ほか編著 2000
55	大孤山2号墓								乙-2	特殊	2	2		徐州市博物館 2009
56	保安山2号墓・1号陪葬坑					i	6		甲	縦横	3	2		河南省商丘市文物管理委員会ほか主編 2001
57	保安山2号墓・1号陪葬坑					不明	不明		甲	斜向	1	2		河南省商丘市文物管理委員会ほか主編 2001
58	陽陵北道陪葬15号墓					ii	6	IV	甲	雲紋	4	2		劉編著 2009
59	陽陵北道陪葬17号墓					ii	4?		甲	縦横	3	2		劉編著 2009
60	陽陵北道陪葬75号墓					ii	4	I	甲	斜向	1	2		劉編著 2009
61	陽陵北道陪葬363号墓					ii	6		甲	縦横	1	2		劉編著 2009
62	陽陵北道陪葬363号墓					ii	6		甲	斜向	1	2		劉編著 2009
63	陽陵北道陪葬678号墓					ii	3		甲	縦横	1	2		劉編著 2009
64	陽陵陪葬墓園					ii	6		甲	斜向	2	2?		劉編著 2009
65	陽陵陪葬墓園								乙-1	無紋	2	2?		劉編著 2009
66	大雲山江都王陵東区17号陪葬墓					iv	6		甲	縦横	2	2?		南京博物院・盱眙県文芸新編 2013
67	南陽一中412号墓					ii	6		甲	縦横	1	2?		南陽市文物考古研究所編著 2012
68	郭杜鎮鄧店西漢中期墓					ii	6		甲	縦横	1	2?		劉編著 2009
69	流水鄉流水村漢墓					iv	6	II	甲	雲紋	2	2~3		劉編著 2009
70	廬江10号墓					vi	5		甲	無紋	2	2~3		安徽省文物考古研究所編著 2013
71	淄博市臨淄区国家村16号墓					ii	4?		甲	縦横	3	2~3		山東淄博市臨淄区文物局 2010
72	海昏侯劉賀墓					ii	6		甲	縦横	1	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
73	海昏侯劉賀墓					iv	4	I	甲	斜向	渦	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
74	海昏侯劉賀墓					ii	7		甲	縦横	不明	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
75	海昏侯劉賀墓					ii	6		甲	縦横	1	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
76	海昏侯劉賀墓					ii	6	II	甲	雲紋	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
77	海昏侯劉賀墓					ii	6	II	甲	雲紋	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
78	海昏侯劉賀墓					iii?	6	II	甲	雲紋	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
79	海昏侯劉賀墓					i?	1?		甲	縦横	2	3		徐主編 2024
80	海昏侯劉賀墓					ii	5		甲	無紋	3	3		徐主編 2024
81	海昏侯劉賀墓								乙-3	無紋	3	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
82	海昏侯劉賀墓								乙-2	無紋	3	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
83	海昏侯劉賀墓								乙-2	縦横	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
84	拖竜山3号墓					ii	7?	II	甲	斜向	2	3		徐主編 2024
85	豐泰墓地365号墓					ii	6	II	甲	雲紋	2	3		徐州博物館 2010
86	姜屯157号墓					iv	5		甲	縦横	4	3		河南省南陽市文物考古研究所・武官大学歴史学考古系編著 2011
87	洛陽西郊3203号墓					不明	不明	I	甲	縦横	2	3		遼寧省文物考古研究所編著 2013
88	邢台市北陳村					iv	6		甲	無紋	3	3		中国科学院考古研究所洛陽发掘隊 1963
89	陽高古城堡12号墓								乙-1	縦横	3?	3?		河北省文物管理処 1980
90	陽高古城堡12号墓					iv	6		甲	無紋	3?	3?		東方考古学会編著 1990
91	陽陵陪葬墓園					ii	6		甲	斜向	2	3?		東方考古学会編著 1990
92	西安北郊白灘村千戸村					ii	6		甲	縦横	2	3?		東方考古学会編著 1990
93	渭城区化社村					不明	不明	II	甲	雲紋	2	3?		陝西省考古研究所編 2001
94	拖竜山4号墓					不明	不明		甲	縦横	2	3~4		劉編著 2009
95	拖竜山4号墓					v	6?		甲	縦横	3	3~4		徐州博物館 2010
96	長沙後湖報告240号墓					iv	7	III	甲	雲紋	3	3~4		徐州博物館 2010
97	連志村11号墓					不明	7	III?	甲	不明	3~4	3~4		中国博物館 1957
98	九龍山20号墓					v?	不明		甲	縦横	1	4		中国社会科学院考古所唐城隊 1991
99	姚莊101号墓								乙-1	無紋	4	4		重慶市文物考古研究所編著 2012
100	土山屯4号村土147号墓					不明	不明	IV	甲	雲紋	4	4		揚州博物館 1988
101	梁山柏木山漢墓					不明	不明		甲	縦横	2	4		青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019
102	西安市電信局第二長途通信大樓110号墓					v	8	III	甲	雲紋	3	4		蘇 1964

103	西安市電局第二長途通信大樓 160 号墓	不明	8?		甲	縦線	3	4	メノウ製、破損。異体銘帯鏡 V-VI 式	西安市文物保護研究所ほか編著 2004
104	西安市南村西北医療設備廠 1 号墓	i	8		甲	縦線	3	4	メノウ製。異体銘帯鏡 V-VI 式	西安市文物保護研究所ほか編著 2004
105	浅井頭漢墓	ii	3	I	甲	斜向	1?	4	獸面紋あり。報告書に依拠、図面が粗雑	洛陽市第二文物工作隊 1993
106	海昏侯劉宋園墓	ii	7		甲	縦紋	不明	4	半浮彫、写真不鮮明	南昌漢代海昏侯園遺址博物館編著 2020
107	海昏侯劉宋園墓	ii	7		甲	縦紋	不明	4	半浮彫、写真不鮮明	南昌漢代海昏侯園遺址博物館編著 2020
108	甘泉県西漢晚期墓	v	7		甲	無紋		4	メノウ製、様相不明	劉編著 2009
109	東龍山西漢晚期墓	ii	6		甲	縦紋	1	4	様相不明	劉編著 2009
110	西安東郊六樹工池西漢晚期墓 110 号墓			乙-2		縦紋	2	4	様相不明、尾がはみ出す	劉編著 2009
111	西安東郊六樹工池西漢晚期墓 110 号墓	iv	8?	III	甲	雲紋	3	4	様相不明	劉編著 2009
112	新宝磚廠西漢晚期墓	ii	6		甲	縦線	1	4	様相不明、図録に依拠	劉編著 2009
113	新宝磚廠西漢晚期墓	i	2		乙	雲紋	不明	4	様相不明、図録に依拠、劣化が激しく紋様不鮮明	劉編著 2009
114	阿房宮鄠北何村	iv	7		甲	縦紋	2	4	様相不明、図録に依拠	劉編著 2009
115	西石羊 80 号墓	ii	6		甲	斜向	2	4	報告書に依拠	陝西省考古研究所編著 2020
116	湖南永州市劉張墓	iv	6	II	甲	雲紋	2	4	竜紋	零陵地区文物工作隊 1990
117	廬江 44 号墓	vi	6		甲	無紋		4	漢鏡IV期	安徽省文物考古研究所編著 2013
118	合浦県母堆鎮 5 号墓	ii	6	III	甲	斜向	1	4	単独出土。獸面紋は追刻か？報告書に依拠	広西合浦県博物館 2007
119	沂水水匯村山漢墓	不明	不明		甲	縦線	1	4?	漢鏡IV期に下る可能性がある鏡が出土。鉄剣を伴わず	沂水県文物管理站 1985
120	郿城漢墓 SJM63	i	1	乙-3?	甲	縦紋	不明	4~5	劣化が激しく紋様細別不可	陝西省考古研究院・楊凌区文物管理所 2018
121	宮城子 2003M76	iv?	8		甲	縦紋	2	4~5	蠅紋を伴うヒレ状裝飾あり	大連市文物考古研究所・大連宮城子漢代墓地工作隊 2019
122	石殿里 200 号墳	v	8	IV	甲	雲紋	4	4~5	高久 1993 に依拠	楽浪漢墓刊行会 1979
123	石殿里 200 号墳	ii	2	IV	乙-2	雲紋	4	4~5	高久 1993 に依拠	楽浪漢墓刊行会 1979
124	丁家皂廬 4 号墓	ii	4		甲	縦線	2	4~5	大泉五十を伴う。単独出土	山東省文物考古研究所編著 2020
125	東陽 4 号墓			乙-2	甲	縦紋	2	4~5	大泉五十を伴う	南京博物院 1979
126	新峰墓地 10 号墓	v	8		甲	蠅紋?	不明	5	メノウ製。貨泉を伴う	許昌市文物工作隊 2010
127	朱倉村 683 号墓墓園	v	8		甲	無紋		5	洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範學院歴史文化學院 2022	
128	石殿里 260 号墳	ii	8	IV	甲	雲紋	4	5	朝鮮古跡研究会編著 1934	洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範學院歴史文化學院 2022
129	東陽 30 号墓			乙-1?	甲	無紋		5	メノウ製。環頭大刀に伴う	朝鮮古跡研究会編著 1934
130	姚庄 102 号墓	不明	不明	IV	甲	雲紋	4	5	拓本のみ	南京博物院・盱眙県博物館 2013
131	西北有色金属研究院 13 号墓	i	2	V	乙-3	雲紋	5	5	大泉五十	揚州博物館 2000
132	資興墓地 204 号墓	不明	8		甲	縦紋	不明	5	破損が激しい	西安市文物保護研究所ほか編著 2009
133	塘山 3 号墓	ii	6		甲	縦紋	2	5	浮彫	湖南省博物館 1984
134	馬家塚子漢墓	i	8		甲	雲紋	5	5		江西省博物館 1981
135	甘泉老史坡漢墓	不明	6?		甲	雲紋	不明	5	写真・図面不鮮明。メノウ製	山東省青州市博物館 2007
136	定県 43 号墓	不明	不明		甲	雲紋	不明	5	校様写真のみ、不鮮明	揚州博物館 1991
137	石鼓墓地 113 号墓	ii	7		甲	無紋	5	5	校様写真のみ、不鮮明	定県博物館 1973
138	上孫家寨 59 号墓	i	2	V	乙-3	雲紋	5	5	明帝期の五銖銭出土と報告。白玉製	山東大學歴史文化學院・山東省文物考古研究院 2024
139	上孫家寨乙 1 号墓	i	2	V	乙-2	雲紋	5	5	報告書の年代に依拠	山東大學歴史文化學院・山東省文物考古研究院 2024
140	貴家官山 8 号墓	v	8	IV	甲	雲紋	4	5	貨泉出土	青海省文物考古研究所 1993
141	洛陽姚溝漢墓 1039 号墓	i	2	V	乙-2	雲紋	5	5	報告書の年代に依拠	青海省文物考古研究所 1993
142	孟津州里鋪 1 号墓	ii	8		甲	縦紋	2	5	半浮彫。三国まで下る可能性	四川大學考古文博學院・成都文物考古研究院 2024
143	石殿里 9 号墳	ii	8	IV	甲	雲紋	4	5	高久 1993 に依拠	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
144	金嶺鎮 1 号墓	v	8	V	甲	雲紋	5	5	後漢書王墓か(劉石?)	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
145	洗硯池 1 号墓西	v	8	V	甲	雲紋	5	5	西晉、長安部成堆	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
146	丹徒葛村 1 号墓	ii	8	V	甲	雲紋	5	5	三国時代。写真不鮮明で紋様不明	京大文学部考古学教室 1950
147	常曹山 2 号墓	v?	8?		甲	縦紋	不明	5	六朝。図面不鮮明	山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局編著 2016
148	常曹山 2 号墓	不明	不明		甲	雲紋	4	5	六朝。拓本のみ、古物を再獲得?	鎮江博物館 1984
149	仙鶴觀 6 号墓	ii	8		甲	縦紋	2	5	東晉。玉具剣に伴う	南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998
150	桂花坪 1 号墓	v	8	不明	甲	雲紋	5	5	東晉。俑とともに単独で出土	南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998
151	洛陽西郊漢墓 3247 号墓	ii	不明		甲	斜向	1	5?	写真不鮮明。年代の判断材料不足	南京市博物館 2001
152	洛陽西郊漢墓 6002 号墓	ii	6	III	甲	雲紋	3	5?	獸面は古い?年代の判断材料不足	長沙市文物考古研究所 2024
153	洛陽西郊漢墓 9002 号墓	vi?	不明	II	甲	雲紋	2	5?	特殊例?年代の判断材料不足	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
154	西安北郊客運北站 9 号墓	v	8	V	甲	雲紋	5	不明	図録は武昭期とするが紋様はより後出するもの。要検討	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963

表2 青銅・ガラスなど可塑性素材の瓏一覧

No.	出土遺構	長鉤	短鉤	獣面	形態	紋様大別	紋様小別	年代	備考	参考文献
1	長沙楚墓 1131 号墓	3	3		甲	縦列		0	戦国後期。ガラス製	湖南省博物館ほか 2000
2	長沙楚墓 599 号墓	3	3	特殊	甲	縦列	2	0	戦国後期。ガラス製、特殊な獣面紋をとまう	湖南省博物館ほか 2000
3	長沙楚墓 894 号墓	3	3	特殊	甲	縦列		0	戦国後期。ガラス製、特殊な獣面紋をとまう	湖南省博物館ほか 2000
4	長沙楚墓 1458 号墓	1	2		甲	螭紋	特殊	0	戦国後期。ガラス製、単独の螭紋	湖南省博物館ほか 2000
5	長沙楚墓 1063 号墓	3	3		甲	螭紋	特殊	0	戦国後期？ガラス製、単独の螭紋	湖南省博物館ほか 2000
6	苗圃山 AM39	直線	直線		甲	螭紋	特殊	0	戦国中後期。ガラス製	衡陽市博物館 1984
7	秦始皇一号兵馬俑坑 T1G3	1	2		甲	無紋		0	銅製	陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古発掘隊 1988
8	廬江 10 号墓	6	1		甲	無紋		2~3	2 に遡る可能性あり	安徽省文物考古研究所編著 2013
9	安子溝 4 号墓	欠	6		甲	縦線	2	4	破損が激しい、ガラス製	山東省文物考古研究所編著 2020
10	廬江 109 号墓	直線	直線		甲	無紋		4	青銅製。漢鏡Ⅳ期	安徽省文物考古研究所編著 2013
11	廬江 113 号墓	直線	直線		甲	無紋		4	青銅製。漢鏡Ⅳ期	安徽省文物考古研究所編著 2013
12	李楼 1 号墓	i	8		甲	無紋		5	青銅製。後漢	安徽省文物考古研究所・淮北市博物館 2007

裏面は平行になり、端部で山形の突起を形成する。
iv 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端に大きなかえしを形成する。かえしの端面は斜めになる。

v 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端にかえしを形成するが、長鉤部裏面の反りは小さくなる。かえしの端面は水平になる。

vi 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。端部は巻き込み瘤状になる。

2-2. 紋様の分類

紋様についてはトゥルースデイルの分類を参考にしつつ、以下のように分類する（図 2）。

○巻螭紋

水滴形の粒紋が、縦横に規則正しく配置される紋様である。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○縦横列粒紋群（以下縦横紋）

小さな粒上の突起が、縦横に規則正しく配置される紋様である。単純に粒紋のみで構成されるもの（縦横-1）、粒同士を刻線でつなぐことにより階段状の紋様を形成するもの（縦横-2）、同様に粒同士を刻線でつなぐことにより四角形を複数配置するもの（縦横-3）、縦横の幅広の凹線で四角形の隆起を作

り出して代替するもの（縦横-4）などがある。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○斜向列粒紋群（以下斜向紋）

小さな粒上の突起が、斜め方向に規則正しく配置される紋様である。単純に粒紋のみで構成されるもの（斜向-1）、粒に渦状の刻線をとまうもの（斜向-2）、粒の間に斜め方向の刻線をとまうもの（斜向-3）、斜めの幅広の凹線で四角形の隆起を作り出して代替するもの（斜向-4）などがある。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○螭紋群（以下螭紋）

肉食獣の頭部、体部と長い尾をとまう動物が描写される紋様であり、大小一組で描かれることが多い。浮彫、半浮彫、線描と表現手法が多様であるが、大きい螭紋の尾の表現が体部と区切られるもの（螭紋 1）と、背の稜線が一続きになるなどして区切りがなくなるもの（螭紋-2）に大別される。トゥルースデイル分類の Hydra Class に相当する。

○蕨手状雲紋群（以下雲紋）

蕨手状の紋様を基調として、紋様を長軸に対して左右対称に配置する。そのほとんどが、甲類であれば短鉤部に獣面をとまう。獣面の特徴によって分類できるが、詳細は後述する。トゥルースデイル分類の Geometric Class に相当する。

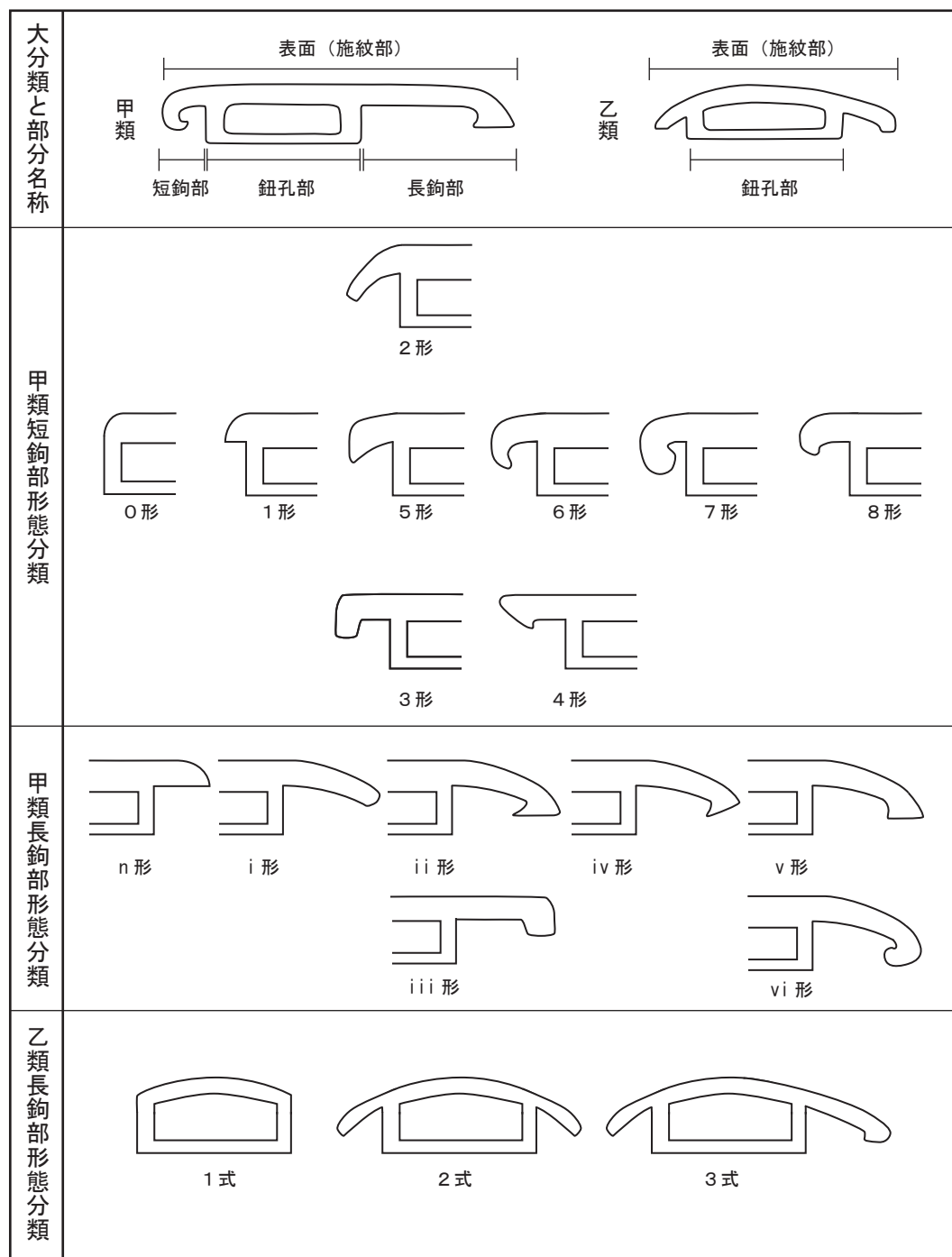


図1 甲類と乙類の形態と部分名称

○縦線紋群（以下縦線）

長軸に対して縦方向の刻線を刻む。刻線を境に施紋面の傾斜が変わるもの（縦線-1）、中軸に比較的近い位置に刻線を刻むもの（縦線-2）、施紋面の両

端付近に刻線を刻むもの（縦線-3）がある。トゥールースデイルが Ridge Class としたものも含まれる。

○無紋

紋様をとみなわないもの。

○その他

上記の分類にあてはまらないもの。

また、上記の雲紋群をはじめとした瓊には、短鉤部付近に獣面紋をとまなうものが散見する。獣面紋は、以下のように分類できる

I類：両眉が直線的につながり、鼻梁に中軸線をとまなわぬ。眉毛は直線的に上方にのびるが、先端の巻きは小さい。目の輪郭は眉から鼻にかけての輪郭と重なり、直線的になる。

II類：両眉が直線的につながり、鼻梁には中軸線をとまなう。眉毛は直線的に大きく上方にのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は眉から鼻にかけての輪郭と重なり、直線的になる。

III類：眉間が谷状に描写され、鼻梁に中軸線をとまなう。眉毛は湾曲しながらも左右端で情報にまっすぐのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

IV類：眉間が谷状に描写され、鼻梁に中軸線をとま

卷螭紋	縦横列粒紋群	斜向列粒紋群	獣面紋
螭紋群	縦横-1	斜向-1	
	縦横-3	斜向-3	
蕨手状雲紋群 (雲紋)		斜向-4	

図2 玉瓊に頻出する紋様の分類

なう。眉毛は湾曲しつつ反りながら上方にのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

V類：眉間が谷状に描写されるが、鼻梁に中軸線をとみなわない。眉毛は湾曲するが情報にはのびず、先端も巻き込まない。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

2-3. 形態変化の検討

甲類と乙類のうち、璫の大多数を占めるのは甲類である。甲類の諸属性のうち、時間的変遷が想定しうるものとして、まず短鉤部が挙げられる。短鉤部の形態は表面の施紋範囲をどこまで確保するかという設計意識と関連し、これが鉤孔部の外側まで拡張され、その端部処理も装飾化してゆく流れの変化が想定できる。

目下発掘事例のなかで最も古いといえる玉璫は、太原晋国趙卿墓（図3-2）や侯馬祭祀遺跡（図3-1）

などの春秋時代後期の遺跡から出土している。これらは0形の長鉤部と0形の短鉤部をとともなうが、これらは表面の施紋部をそれぞれ水平方向と鉤孔部方向に拡張した結果生じたものであると理解できる。長鉤部が施紋部を水平方向に拡張したために成立したことは、陝県後川村2040号墓例が長鉤部を別づくりにして接合している点からも追認できる（図3-3）。この0形の短鉤部を、表面から屈折なく展開できるように鉤孔部より外に拡張した結果生じたのが1形の短鉤部であり、少なくとも戦国後期から秦代には出現している。これがさらに外側に拡張された結果生じたのが2形であり、1形の端部を平坦に整えると5形が得られる。これをさらに鉤孔方向に拡張し、装飾化したものが6形だろう。7形は6形が端部まで肥厚したもの、8形は6形や7形が矮小化したものと理解できる。

ただしこのような一連の流れのほかに、長沙楚墓から3形の短鉤部をとともなうガラス製の事例が出土

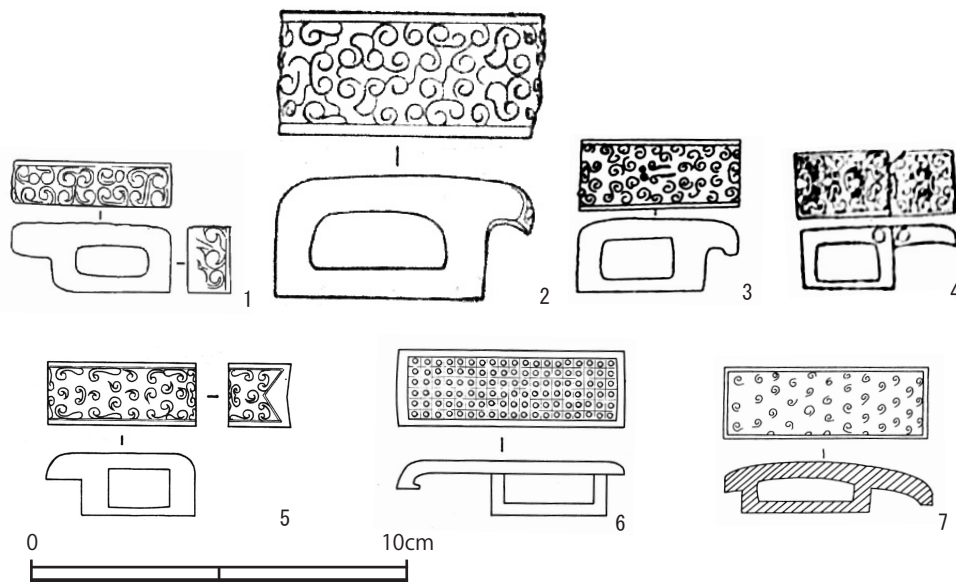


図3 前漢以前の玉璫（1：表1-1、2：表1-2、3：表1-5、4：表1-3、5：表1-6、6：表1-7、7：表1-8）

している（図4-2~5）。これに類似するガラス製品が衡陽市の戦国時代中後期の墳墓から出土しており（図4-1）、これは平坦な施紋部に、四肢が長大化した螭紋をともなう事例である。このガラス製品の端部処理が甘くなり、端部下端に突出部を残すようになったものが長沙楚墓例であろう。晋国趙卿墓に端を発する一連の事例の表面がやや湾曲しているのに対し、これらの事例は表面が直線的になる点に特色がある。3形の短鉤部は、このようなガラス製品の形態を模倣した可能性を考慮しておきたい、さらに4形は、3形の端部を斜め方向に平坦部を作り出した事例と考えられる。長沙楚墓のガラス製品は縦横紋-2をともなうなど漢代以降の玉璫につながる要

素もあり、素材は異なるものの漢代以降の製品に影響を与えた可能性が考えられる。

長鉤部もまた、晋国趙卿墓例や長沙楚国墓地例から派生したものとして理解できる。趙卿墓例のn形の長鉤部をさらに外側に拡張したものがi形、その端面調整を兼ねて装飾的に拡張したものがii形、ii形が粗雑化ないし矮小化したものがiv形およびv形である。vi形はii形下端の面取りが省略されたものだろう。iii形は3形短鉤部と同様長沙楚国墓出土例に散見するため、やはり戦国時代の楚国に特徴的な形態として位置付けられよう。

以上のように、いくつかの派生形態をともないながらも、短鉤部と長鉤部には一連の変化を想定でき

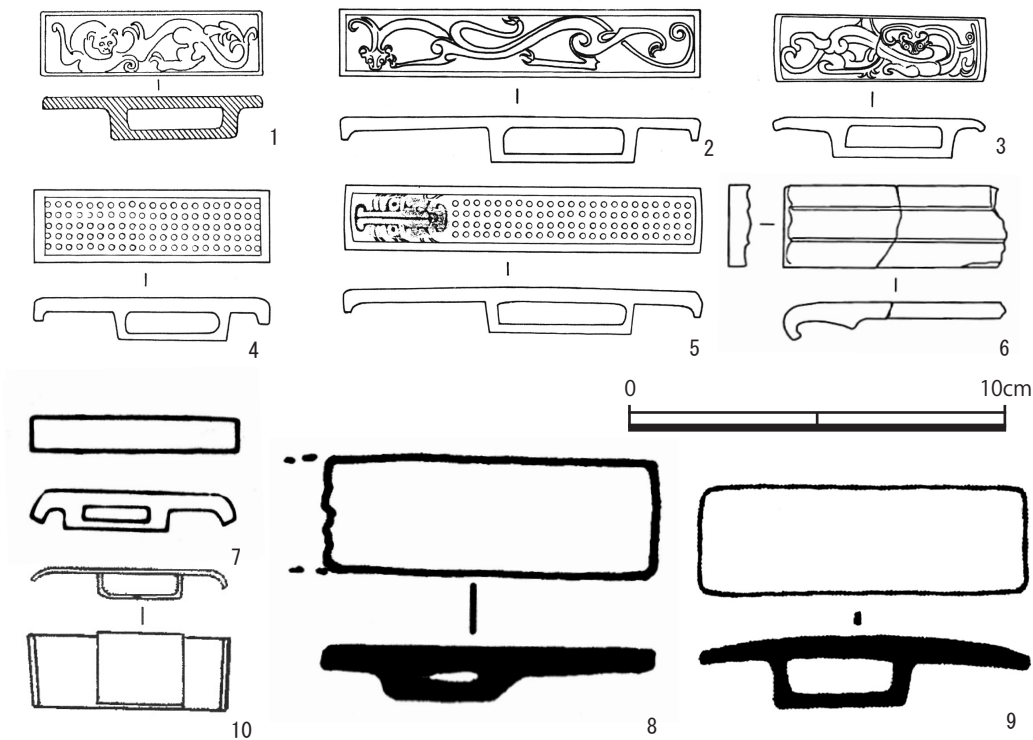


図4 青銅・ガラスなど可塑性素材の璫（1：表2-6、2：表2-5、3：表2-4、4：表2-1、5：表2-3、6：表2-9、7：表2-7、8：表2-10、9：表2-11、10：表2-12）

る。この2つの属性の対応関係をみたのが表3である。この表から、短鉤部と長鉤部の諸形態が1対1で対応するわけではないものの、短鉤部と長鉤部の組み合わせでそれぞれ最も多いものが、上述した短鉤部および長鉤部に想定される変遷とおおよそ一致している。これは先行する形態と後続する形態がある程度の時間共存しながらも次々に継起し、結果として盛行した年代を異にしていたことを示唆している。また短鉤部3形はおもに長鉤部iii形に対応することから、これらの形態は上記の変化の流れとは異なる流れに位置付けられることが改めて確認できる。

これを別の角度から検証しよう。上述した紋様およびその要素のうち、もっとも変遷を追跡しやすいのが獣面紋である。獣面紋は上述した長沙楚国墓地例を例外として、太い眉、杏仁形の目、柱状の鼻、心葉形のたてがみを共通の特徴とし、異なる個体間で著しく類似している。そのなかでも上述した諸類型に分類された獣面紋は、I類からV類へと、記号的な描写からより躍動感のある描写に変化してゆく流れが想定できる。この短鉤部との対応関係を確

認したのが表4である。これをみると、I類に3形と4形が、II類に6形が、III類に6形と7形と8形が、IV類に6形と8形が、V類に8形が対応する。このことから、おおよそ獣面紋IからV類への変化が短鉤部の消長と連動していることがわかる。したがって、短鉤部の変化は獣面紋との対応関係からも追認できる。

以上から、短鉤部および長鉤部の形態によって設定された型式区分が、玉璣の時間的変化とおおよそ代表していることがわかる。ただし、長鉤部のうち大多数をしめるii形は戦国後期の墓からも報告されており、実態としては相対的に早く出現した長鉤部形態が、遅く成立した形態と併存する時間がある程度存在したと考えられる。したがって本稿では短鉤部の形態を玉璣の時間的変遷をもっとも端的に代表する属性と考え、0から8形それぞれに応じて0から8式として大型式を設定し、長鉤部の形態を小型式として記述する。例えば、6形の短鉤部とii形の長鉤部をもつ玉璣は6-ii式と呼称する。ただし以下では基本的に1~8型式の大分類を中心に検討する。

表3 甲類玉璣における短鉤形態と長鉤形態の対応関係

() 内は破損例を含めた判断が難しい資料を含めた点数。以下同様。

また濃い網掛は短鉤・長鉤部双方で最多のものを示し、薄い網掛はいずれか片方で最多のものを示す。

	0	1	2	5	6	7	8	3	4	不明	計
n	5										5
i	1	7	1	1(2?)	3		2				15(16?)
ii		2		4	28	5(6?)	5	2	4(6?)	1	51(53?)
iii				2				1	1		4
iv			(1?)	1	6	2	(2?)		1		10(13?)
v			1		2(3?)	1	9(10?)			(1?)	13(16?)
vi				1	2					1(2?)	4(5?)
不明		1		(1?)	1(2?)	1	1(2?)		1	5	9(12?)
計	6	10	2(3?)	9(11?)	42(44?)	9(10?)	17(21?)	3	7(8?)	7(9?)	112(125?)

表4 甲類玉璫における短鉤形態と獣面紋の対応関係

	I	II	III	IV	V	計
3	1					1
4	2					2
6		5	2	1		8
7		(1?)	1(2?)			1(3?)
8			1(2?)	4	3	8(9?)
不明	1	2		2		5
計	4	7(8?)	4(6?)	7	3	25(28?)

2-4. 玉璫の紋様の変遷

以上を踏まえ、玉璫に施される紋様の消長について考えたい。甲類短鉤部によって代表される大型式と、表面に施される紋様との対応関係を表したのが表5である。巻螭紋は0式のみに対応し、出現当初の型式に特有の紋様であったことがわかる。1から6式に対応するのが斜向紋、縦横紋、螭紋、無紋の事例であり、巻螭紋に後続して出現するのがこれらの紋様であるといえる。雲紋は6から8式のみに対

応し、上述した紋様と比べ出現が遅れることがわかる。また斜向紋、縦横紋は8式には対応せず、7式ではバリエーションが減る。これらの紋様と入れ替わるように雲紋が盛行している様子を見出すことができる。

この紋様の消長について、獣面紋と紋様の対応関係を確認したのが表6である。獣面紋Ⅰ類は斜向紋と縦横紋に、Ⅱ類は斜向紋と雲紋に、ⅢからⅤ類は雲紋のみに対応する。すなわち、上述した短鉤部にみる斜向紋、縦横紋、雲紋の消長と、獣面紋の変化にみるそれとが一致するのである。このことから、斜向紋と縦横紋はある程度の重複を挟みながらも雲紋へと入れ替わっていったことが示される¹⁾。

螭紋は、欠落する型式がありつつも8式まで対応する。上述した紋様の小分類のうち、1点だけではあるが1式の事例に螭紋-1が対応している。一方螭紋-2は6から8式に対応することから、全体として螭紋-1→螭紋-2と遷移する。

表5 甲類玉璫における短鉤形態と各種紋様の対応関係

	卷螭	斜行				縦横				螭紋		雲紋				縦線			無紋	特殊	不明	計
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	2	3	4	5	1	2	3				
0	5(6?)																					5(6?)
1		2	2				(1?)			1						1			2	1		9(10?)
2		1			1	(1?)	1												1			4(5?)
5		2		1		(1?)	1		1	1									2			8(9?)
6		4	3	1		5	1	4(5?)		6	3	5	1	1			1		4	1	1	41(42?)
7			(2?)				1				1		1						2			5(7?)
8											3		1(2?)	4	4			1	1			14(15?)
3		(2?)				1	1			1												3(5?)
4		1					2(3?)	(1?)		1								(1?)				4(7?)
不明		2	1			3	3				1	2		3								15
計	5(6?)	12(14?)	6(8?)	2	1	9(11?)	10(14?)	4(6?)	1	10	8	7	3(4?)	8	4	1	1	1(2?)	12	2	1	108(113?)

表6 玉璫における各種紋様とそれとともなう
獣面紋の対応関係

	I	II	III	IV	V	計
斜行	3	1	1			5
縦列	1					1
雲紋		7	4	8	7	26
計	4	8	5	8	7	32

2-5. 各型式の年代

以上、玉璫の属性分析から変化の傾向を確認し、短鉤部の形態による型式区分が有効であることを明らかにした。それでは、短鉤部形態によって設定される各型式の存続年代はどのように理解できるだろうか。各型式のおおまかな存続年代を把握するために、表1では秦代までの遺構を0期、前漢初頭から景帝期の遺構を1期、武帝期の遺構を2期、昭帝から宣帝期にかけての遺構を3期、元帝から前漢滅亡にかけての遺構を4期、新代以降の遺構を5期として出土遺構の時期を付記している。年代は基本的に各報告書の記載によるが、必要に応じて修正をおこない、その手掛かりとなった要素を備考欄に記入している。また多くの玉璫が収録されている『陝西出土玉器』に記載している年代は、出土状況がわからず疑問の余地のあるものも多いため、表中には記載しているものの、参考程度にとどめておく。

0式は1期以降の遺構から出土することはない。上述したように最古の事例は春秋後期の遺構から出土しているが、最も新しい事例は戦国中期の長沙楚国墓地167号墓例（図3-5）であると考えられ、戦国後期以前に衰退している。

1式は0期に遡る事例が散見し、戦国後期には出現していることが、長沙楚国墓地1065号墓例（図3-4）からわかる。最も出土数が多いのは1期であり、一部2期の遺構からも出土している。古物の可能性もあるが、もっとも新しいものでは3期末の海昏侯劉賀墓からそれらしいものが出土している。最新段階の評価が難しいが、前漢の初期に盛行した型式と

して評価できる。

2式は点数が少ないものの、広州漢墓1068号墓例（図5-1）が1~2期に遡る。また玉製の事例ではないものの、秦始皇陵兵馬俑出土の青銅璫（図4-7）が甲類2-i式に分類可能な形態をとっており、これが玉璫の形態を反映していた場合、0期に遡る可能性がある。また2式もまた2期の遺構からの出土例がある。

5式は文帝期の遺構と推定される胡家草場墓地12号墓出土事例が、確実なものでは最も古く、1期に遡る確実な事例である（図5-3）。また『陝西省出土玉器』に高祖長陵陪葬墓園出土例として前漢前期に位置付けているものがあり、その年代観に従えば1期のさらに早い時期に遡る可能性が高い。5式そのものの数は多くないものの、目下0期に遡る事例はないため、1期以降に成立する型式と考えられる。新しい遺構では3期の墓から出土している。

6式は、平面形態がやや特殊な事例ではあるが1期の徐州市獅子山漢墓出土例が年代が確実なものでもっとも古い事例である。本遺跡は劉郢（客）ないし劉戊墓に比定されるが、劉尊志は墳墓の内容が呉楚七国の乱を起こした劉戊墓にしては豊かすぎるとし、劉郢（客）墓に比定する[劉2011]。この推定が正しければ劉郢（客）が亡くなる文帝期の前175年前後には6式が成立していたことになる。また劉茂墓説を採るとしても景帝期の前154年前後に位置付けられ、いずれにせよ1期に遡ることになる。このほかに1期に遡る可能性がある事例として、三門峡市火電廠21号墓例（図5-4）や広州漢墓1175号墓例（図5-5）があり、特に前者は前漢前期の中でも早い段階に遡る可能性がある。ただし1期に遡る可能性がある資料は少なく、2期以降に集中する。2期の古い資料として南越王墓出土例（図5-6）が挙げられる。この墓は前122年に亡くなった南越王趙昧の墓と報告されている。以上から、6式は1期に成立し、2期以降に盛行した型式として位置付けられよう。3期、4期の遺構からも複数出土し、5

期の遺構からも少数ながら出土している。

7式は双乳山1号墓例(図5-7)が最も古い。この墳墓は武帝期末年に亡くなった済北王劉寛の墓と考えられており、2期から3期の移行期に位置付けられる。本例は副葬された長剣にともなう事例であり、これについては後述する。それ以外の事例は年代の判断が難しい長沙市の前漢後半の事例(図5-9)を含め、3~4期に集中する。

8式は西安市電信局第二長途通信大樓110号墓(図5-10)をはじめ4期に出現し、5期にはいっても存続する。5期の資料数そのものが多いもの、最も新しい資料は東晋代の墳墓から出土している。

3式は1期の孔家坡8号墓から出土している木剣にともなう事例(図5-11)がもっとも古く、一部4期および5期の遺構からの報告事例がある。4期の洛陽市浅井頭漢墓の事例(図5-12)に関しては図面が簡素であり、本来異なる形態である可能性が捨てきれないため判断を保留したい。後者に関しては墳墓ではなく遺構の埋土から出土した事例である。形態も長さに対して幅広く特殊な形態をとるため、当該期のなかでは例外的な存在である。このように3式は1期以降を中心に組成する型式であるが、ガラス製の事例には0期に遡る事例として長沙楚国墓地の製品がある(図4-2, 4, 5)。前漢前期に楚の影響を受けて成立するものの、例外的ながらそれ以降も散見する特異な型式である。

4式は4点の資料のうち広州漢墓1175号墓例(図5-13)をはじめ3点が2期、1点が3期に位置付けられる。ただし、潜山彭嶺26号墳(図5-14)から出土した木剣にともなう玉璫様の玉製品が、4式に類する端部形態を示している。鈕孔部に方孔をとまなわれないものの、これが玉璫に含められるのであれば4式は1期に出現していたことになる。なお5期に位置付けられる墳墓からも1点出土しているが、これに関しては後述する。

以上から、1式と2式は0期に出現し、1期に盛行する型式、5式は1期に出現し3期まで存続する

型式、6式は1期に出現し2から4期に盛行する型式、7式は2期末に出現し4期に盛行する型式、8式は4期に出現し5期まで盛行する型式とみなすことができる。以上から、上述した1式から8式に至る型式変化は、出現順、盛行順いずれも0式→1式・2式→5式・6式→7式→8式の順に遷移しており、上述した先行型式と重複しつつ1式から8式に順に派生してゆくという想定は、出土遺構の年代と矛盾がないといえる。

2-6. 乙類の変遷

以上甲類の変遷について検討したが、乙類は甲類に比べ形態変化に乏しいが、側面形に応じて以下のように分類できる。

1式：鈕孔部の前後に鉤部がのびないもの。

2式：鈕孔部の前後に対称に鉤部がのびるもの。

3式：鈕孔部の前後に非対称に鉤部がのびるもの。

これを上述した時期区分にあてはめると、1式は0期の白鷺洲585号墓例(図6-1)が最も古い事例である。ついで象牙製の事例ではあるが、馬王堆3号墓出土長剣にともなう璫(図6-3)が古く、1期まで遡る。最も新しい事例は東陽漢墓群30号墓から出土した事例(図6-4)で、5期に位置付けられる。2式は確実に古く遡るものに広州漢墓1175号墓出土の特殊な紋様をとまなう資料(図6-5)があり、2期に位置付けられる。ただし2式も『陝西出土漢代玉器』に1期に遡る可能性のある資料が掲載されていることから、1期に出現している可能性もある。2式もまた石巖里200号墓例(図6-6)など5期の遺構から出土している。3式は3期に遡る海昏侯墓出土のメノウ製事例(図6-7)が最も古く、上孫家寨59号墓例(図6-8)をはじめ5期まで存続する。

このように整理すると、0期に1式が、1ないし2期に2式が成立し、これに遅れて3式が3期に成立することがわかる。ただしこの時、2式にとまなう紋様をみると、大多数が螭紋・2式および雲紋・4ないし5式と、甲類の変遷のなかで最終段階に出現

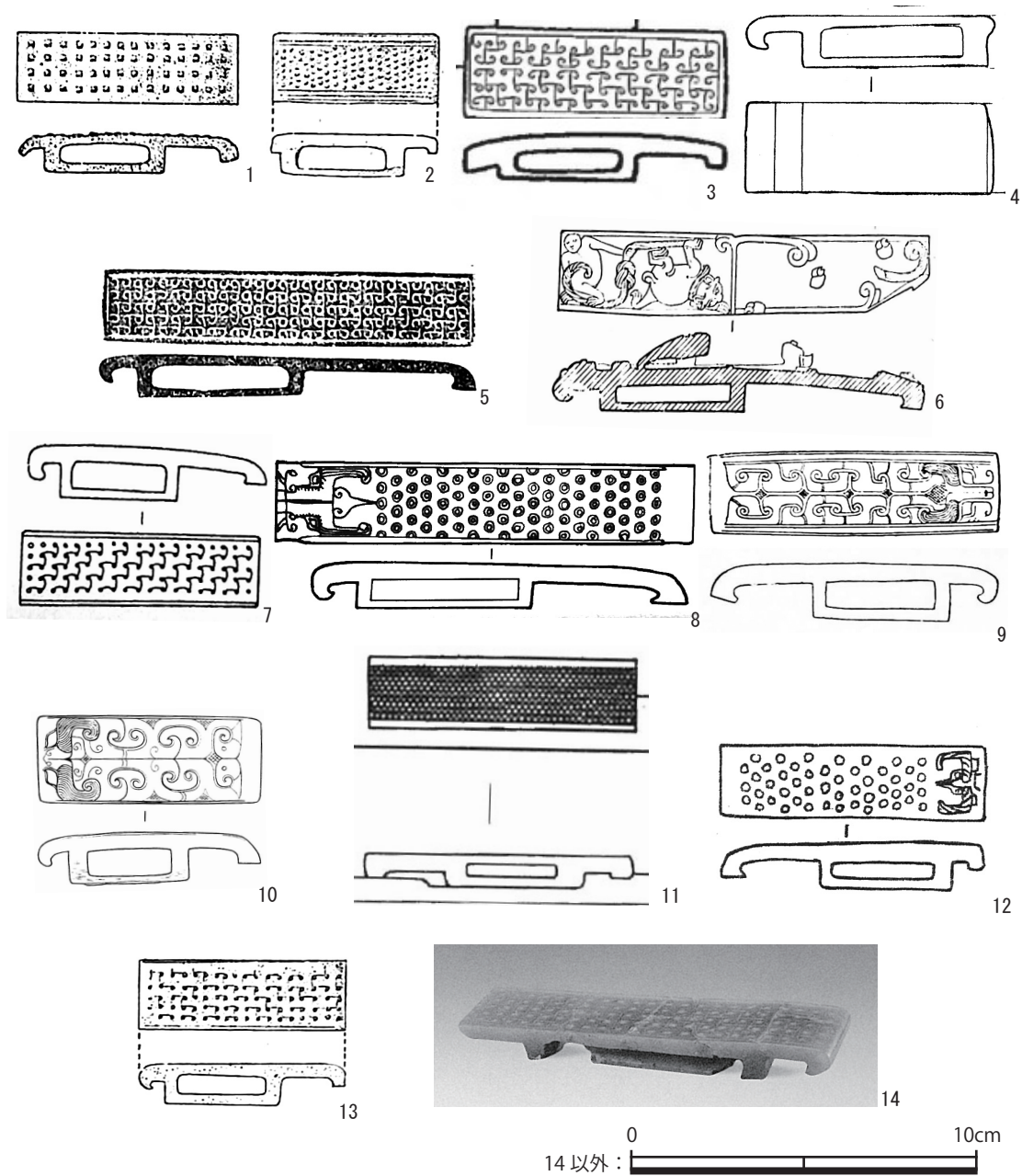


図5 前漢期の甲類玉璫の諸例（1：表1-32、2：表1-39、3：表1-25、4：表1-26、5：表1-37、6：表1-46、7：表1-43、8：表1-84、9：表1-96、10：表1-102、11：表1-16、12：表1-105、13：表1-40、14：表1-11）

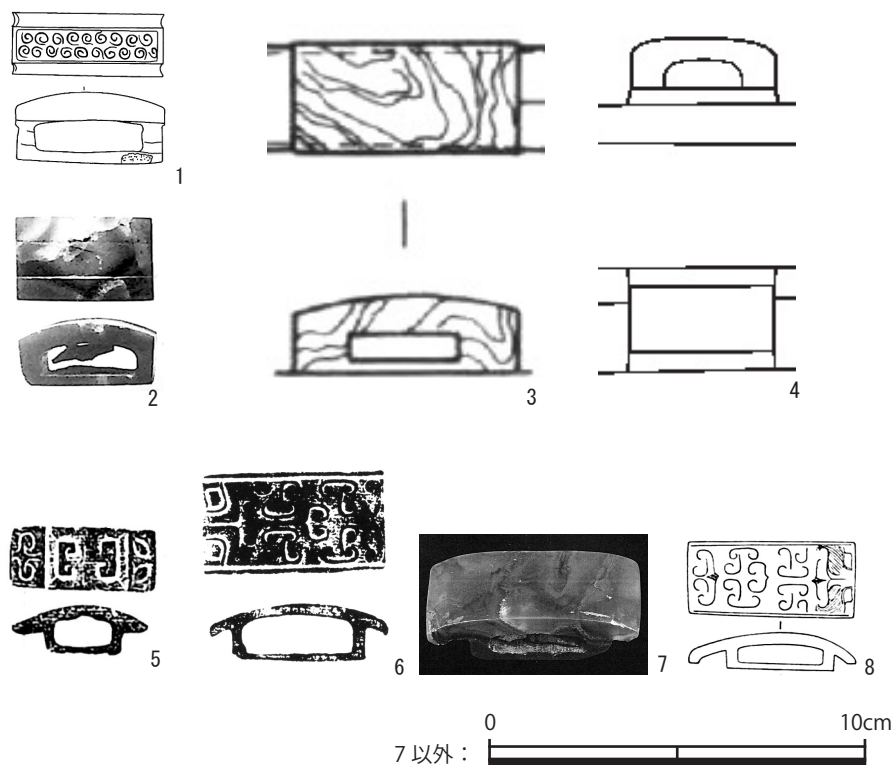


図6 乙類玉璫の諸例（1：表1-10、2：表1-89、3：表1-23、4：表1-129、5：表1-38、6：表1-123、7：表1-82、8：表1-138）

する紋様であることがわかる（表6）。点数そのものが少ないものの、同じ傾向を3式に関しても指摘することができる。すなわち、2式および3式の出現自体は古く遡りうるが、その盛行期は大きく時期が下ることを示す。乙類の出土の半数以上が4期以降の遺構に偏っていることも、これを傍証する。

表6 乙類玉璫における各型式と獣面紋の対応関係

	斜向	鱗紋	雲紋		縦線	無紋	特殊	計
	2	2	4	5	2			
1	1				1	3(4?)		5(6?)
2		2	1	2	1	1	2	9
3				2		1		3
計	1	2	1	4	2	5(6?)	2	17(18?)

3. 考察

以上、玉璫の変遷を属性分析と出土遺構の時期から考察した。その結果を踏まえ、以下では玉璫の製作状況について考察する。

3-1. 漢代以前の璫

目下最古の玉璫は春秋後期の墳墓から出土した事例であることは上述した。これに連なる戦国時代の事例には卷螭紋（図 3-1~5）が描かれており、これが斜向紋-2 や縦横紋-2 の祖型になったと考えられる。これらの事例は三晋地域を中心に分布しており、長沙楚墓にみるように一部長江流域にも展開している。

一方、螭紋はこれら三晋地域の事例にはみられず、長沙楚墓や衡陽市苗圃山など楚国の領域から出土するガラス製事例（図 4-1~3）に見出される。これらの事例は三晋地域の事例とも形態が異なり、楚独自に発達した一群であるといえよう。漢代玉璫の形態は三晋地域の事例に起源を求められることは上述した通りであるが、表面に描かれる紋様には三晋地域に加えて楚地域の要素が加わり、その双方が融合して秦および漢に継承されたといえる。

3-2. 玉璫の変遷過程からみた製作状況

前章で確認した玉璫の変遷を踏まえると、戦国時代中期から武帝期にいたるまでの間に各型式の派生が急速に起こっていることがみてとれる。続いて新しい型式が派生するのが昭帝期以降のことであり、これは玉璫全体のなかで最も多くを占める 6 式の派生型式として出現する。以上を踏まえると、0 式が衰退する戦国中期から景帝期までを玉璫の形態がさまざまに試行された段階、武帝期を玉璫の主流の型式が出そろい、6 式、特に 6-ii 式と中心的な形態として標準化が進んだ段階、昭帝期から宣帝期を一度標準化された玉璫の変容が始まる段階と位置付けることができる。また紋様の消長を踏まえると、斜向

紋や縦横紋は卷螭紋からの連続性が認められ、春秋戦国時代からの紋様の延長線上で理解できる。元帝期以降にはこの紋様が消滅し、かわって出現した雲紋が多数を占めるようになる。期間の長さに対し出土点数が多くないことも要因としては大きい。新代以降は玉璫に目立った変化がみられなくなる。そのような意味で、元帝期以降は玉璫のデザインが完成され、同時に変化が停滞した段階とも評価することができる。

玉璫の変遷のなかでは複数の型式が入り乱れる状況がほとんどであり、新しい型式は旧来の型式を淘汰するわけではなく、派生的に出現するに過ぎないことは前述した。特に武帝期には数の多寡はありながらも 1 式から 6 式までが存在していたことになり、これらすべてに製作年代から埋葬年代までのタイムラグを認めることは不合理である。このような状況からは、旧来の型式を維持する製作者と新しい型式をもっぱら製作する製作者が、同時に存在していた状況がうかがえる。ただし、各型式が製作者集団と一対一で対応するわけではないことは以下で述べる。

武帝期には全型式のなかで最も出土数が多い甲類 6-ii 式が成立する。そのなかにはいくつか同一遺構ないし墳墓から出土した事例があるが、その紋様が一致することはなく、異なる製作者から入手した可能性が高い。したがって武帝期には、異なる製作者間で志向される璫の形態が共有されていたと考えられる。

昭帝期から宣帝期には、武帝期までとは異なる傾向が現れる。雲紋の紋様が出現し、4 期には縦横紋や斜向紋を淘汰していったのは上述した通りである。それに加えて、この時期にはメノウ製の玉璫の製作が増える。メノウ製玉璫は無紋か縦線紋の事例で占められており、ほかの製品と比べ造りが粗雑であることが多い。このことから、メノウ製玉璫はそのほかの有紋の事例とは異なる製作者の手によってつくられたことがうかがわれる。興味深いのは、こ

のような製品が西安市近郊でも出土していることである。少なくとも昭帝期から宣帝期にかけては、長安近傍で複数の製作者集団が共存していた状況を想定できる。

異なる系譜の玉璫が漢の領域内に存在したことは、廬江遺跡出土の玉璫からもうかがい知ることができる（図4-8, 9、図7）。廬江出土の璫は青銅製事例を含め無紋の事例が多く、形態が前漢中期から後期に一般的な事例とは異なる様相を呈する。また同遺跡では青銅製の長剣が多く出土しており〔安徽省文物考古研究所編著 2013〕、中国北半で大多数を占める鉄製長剣とは異なる販路にのる製品が用いられていた可能性を指摘できる²⁾。このような青銅製長剣にともなう璫の事例は少ないが、鉄製長剣や戦国系の青銅剣とは異なる璫が用いられていた。このような事例の存在は、特定の工房が璫の製作を独占していた状況は少なくとも想定しがたいことを示している。

4期以降になると、螭紋、雲紋、無紋以外の事例が衰退し、以降これらの紋様の事例のみが製作されることになる。最も数が多い雲紋の事例にはいずれも獣面紋が描かれるが、これはいずれもⅣ類ないしⅤ類に分類され、目や眉といった各部位の特徴を共有している。そのなかには描線を削り出し突線で引くものと沈線で引くものといった違いがあるなど、

複数の製作者の存在を想定できるものの、同じ図像を共有できるほどには頻繁に接触しうる近しい関係が維持されていたことが想定できる。4期以降玉璫そのものの出土数が減少することからは、玉璫の製作そのものが衰退し製作者集団の数も減っていたことが考えられる。

最終的に螭紋と雲紋の8式に収斂した甲類玉璫は、目下最も新しいもので東晋期までは墳墓からの出土が確認できる。5期の資料はその期間の長さには比して数が少なく変化にも乏しいため、新しい墳墓からの出土事例が古い玉璫を再利用した可能性も否定できない。しかし一方で元帝期以降の製作に下る可能性もまた、新しい資料から縦横紋や斜向紋が欠落することから指摘できる。東晋初期の仙鶴観6号墓出土例は鉄製長剣にともない、珌や剣首といった装具も長剣への着装を示す位置から出土していたという〔南京市博物館 2001〕。特に珌と剣首はいずれも玉璫の雲紋にともなう獸面紋Ⅴ類を共通して施しており、元帝期以降に同時に製作されたことがうかがわれる。剣と鞘の装具が同時に製作されていることから、これに取り付けられた玉璫も同時に製作されたと考えられる。したがって鞘などの装具とセットで長剣そのものが長期間保存されていた可能性も残るが、現状では玉璫の製作が後漢代以降も存続していたと考えるのが合理的だろう³⁾。

3-3. 玉璫の使用形態と長期保有の可能性

戦国時代から南北朝期にかけての玉璫の製作状況は上のように整理されるが、その使用形態はどうか。『漢書』『王莽伝』に王莽が「璫を解く」記述があり、先学が指摘するようにこの「璫」が璫を示すものであれば〔林 1973〕、これは璫を長剣鞘から分離する儀礼的行為の存在を示している。出土事例からみると璫は鞘に括り付けるのではなく、漆で膠着させることで固定する。したがってこの「璫を解く」行為は、不可逆な破壊を璫付きの鞘に施すことになり、璫そのものも長剣とは独立した履歴を

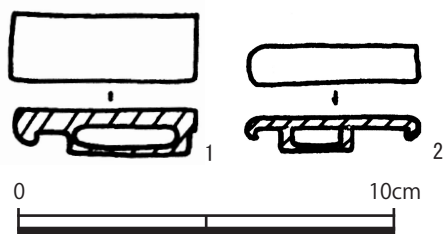


図7 廬江遺跡出土無紋玉璫（1：表1-70、
2：表1-117）

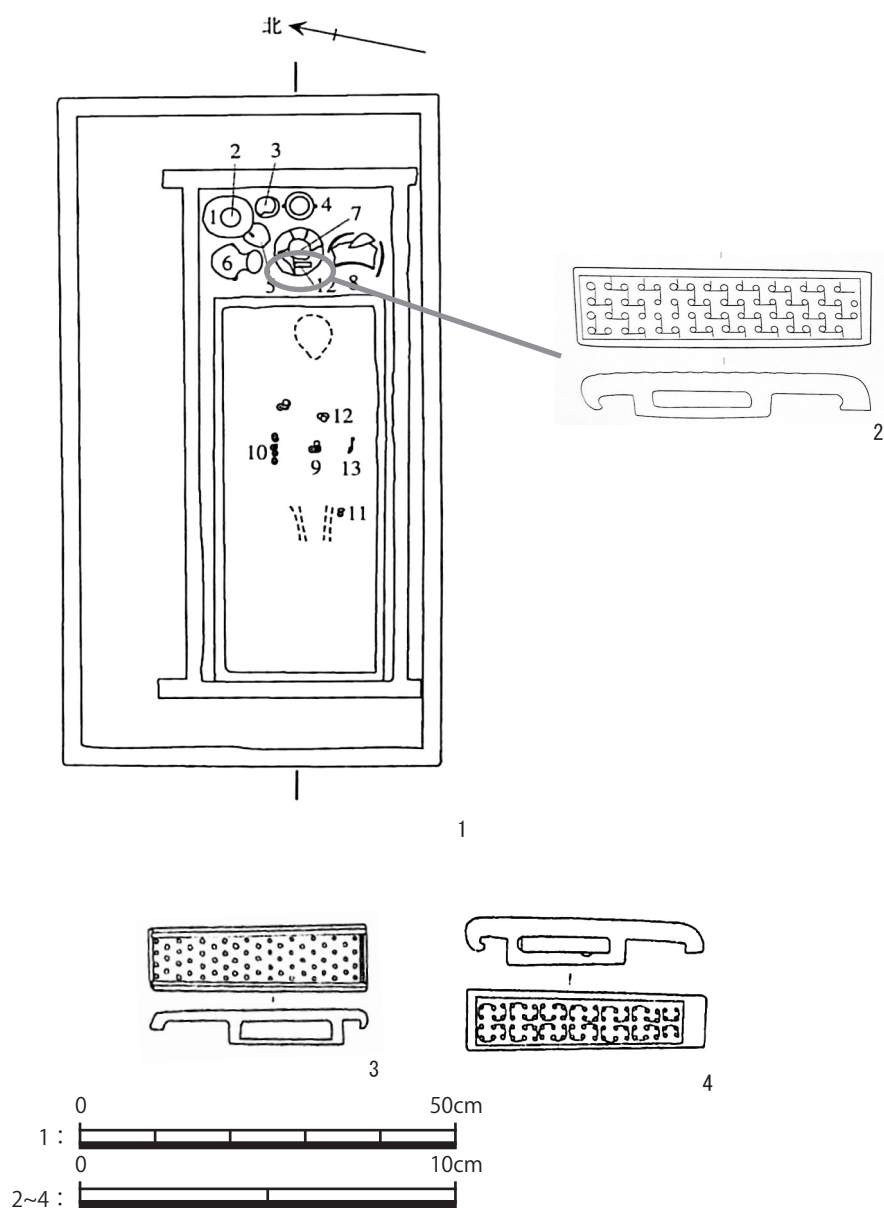


図8 転用ないし再獲得された玉璫とその出土状況（1：丁家皂廬4号墓、2：表1-124、3：表1-44、4：表1-45）

たどりうる余地が生じる。

玉璫には長剣にともなわず単独で出土する事例がいくつか存在する。このなかには孔家坡8号墓例(図5-11)のように木剣にともなう玉璫も含まれると考えられるが、一方で山東省丁家皂盧4号墓例(図8-1, 2)のように単独で副葬された可能性の高い事例も存在する。本例は頸のすばまる施釉壺の肩部上から出土しており、その出土状況からは木剣などをともなっていたことも考え難い。本例は縦横紋-2をとともなう4式の事例である。上述したように4式は数が少ないながらも多くが1~2期の遺構から出土しており、縦横紋-2をとともなう事例は元帝期以降の遺構からはほとんど出土していないことから、製作時期は宣帝期以前に遡る可能性が高い。しかしこの墓からは大泉五十が50点出土しており、王莽期に造営されたことが明らかである[山東省文物考古研究所編著2020]。すなわち宣帝期以前に製作された玉璫が、少なくとも50年以上の年月を経て単独で埋葬されたものと解釈できる(図8-1, 2)。

このほかに、破損した玉璫を転用した事例も存在する。双乳山1号墓では長剣にともなう玉璫(図6-7)以外に2点の玉璫(図8-3-4)が出土しているが、これらは含玉として被葬者の口中から出土したものである。長剣にともなう個体は7式、含玉とされる転用例は6式に分類できる。7式は昭帝期以降に盛行する型式であり、副葬段階で最新の型式であったと考えられる。6式はそれ以降も盛行するため判断は難しいものの、含玉の玉璫の製作時期は長剣にともなうそれよりも遡る可能性がある。ただし6式そのものが武帝期以降に盛行する型式であるため、製作時期の差は長くても60年前後であったと考えられる。

また、洛陽浅井頭漢墓出土の3式例(図5-12)は、獸面紋Ⅰ類をとともなう斜向紋の事例であり、昭帝期から宣帝期にかけて製作された可能性が高い。報告ではこの璫は長剣にともなっていたとされる。しかし同報告でこの遺構は前漢末に位置付けられ、出土

した鏡などからもその見解は補強される。したがって本例もまた装具とともに長剣が長期保管されたか、古い璫を転用した事例である可能性が高い。

このように玉璫が製作時期を大きく下る遺構に副葬される事例は、前漢期の墳墓に散見する。しかし目下前漢期の事例では100年以上の時間差がある事例は多数の副葬が認められる海昏侯劉賀墓を除いて見出しがたく、また多くの事例はあまり時間を隔てず最終的な副葬がおこなわれた事例であることもまた指摘しておきたい。

3-4. 中国境外で出土した玉璫について

以上、戦国時代から東晋期にかけての玉璫の製作と使用の状況について考察した。当該期における玉璫は、製作から最終的な埋没まで100年を超える時間差は現状では指摘できず、かつ大きな時間差が明確に指摘できる事例も限定的であった。各王朝の支配領域外に搬出される際も大きな時間差は、基本的にはなかったと考えられる。これを踏まえ、これまで知られている中国境外の玉璫について、その位置づけを考えたい。

・伝コーカサス出土大英博物館所蔵玉璫 (Museum Number 1923, 0716.88)

クバン地域出土と伝えられている玉璫であり、ロストウツェフにより紹介されている[Rostovcev 1930]。共伴した遺物から、3世紀のサルマタイの墳墓からの出土品と考えられている。側面形からは6-ii式に属すると判断できる。また紋様は磨滅が著しいが、雲紋の事例であることは明らかであり、特に磨滅が激しい短鉤部にはわずかに目とおぼしき表現と眉の輪郭が残存している。これをみると、眉間とみられるV字状の描線と上方に大きくのびる眉が確認でき、雲紋-3に分類できる。雲紋-3の事例は前漢末の遺構である西安市電信局第二長途通信大楼110号墓から8式の事例が出土しており、伝コーカサス出土例もこれに近い年代を与えることができよう⁴⁾。

・ゴル・モド2遺跡10号貴族墓

目下最大の匈奴貴族墓とされる、ゴル・モド2遺跡1号貴族墓と同一の墓地に築かれた匈奴貴族墓である。炭素年代測定の結果と共伴する鍔の形態から、南北分裂後の北匈奴の貴族墓と考えられ〔河南省文物考古研究院ほか編著 2021〕、中国の後漢期に並行する。この墓の被葬者の頭部付近から、白玉製の無紋の玉璣が単独で出土した（図9）。本稿の分類基準で考えるなら、本例は7-ii式に位置付けられる。元帝期以降の無紋の事例として、後漢の諸侯王墓とされる朱倉村683号墓墓園出土の8-v式資料や、明帝期から章帝期とされる石鼓墓地113号墓の7-ii式の例が知られている。特に後者は型式・時期共にゴル・モド2遺跡例と対比可能であり、当該期に中国で製作された製品がモンゴル高原に持ち込まれたものと考えられる。

・ロシャヴァ・ドラガナ墳墓

ブルガリア共和国スタラ・ザゴラ市近郊の後1世紀末から2世紀初頭の大墳墓であるロシャヴァ・ドラガナ墳墓から璣をともなう鉄製長剣が出土しており、璣の最西限の出土資料として著名である〔Gonthier, Kostov, Strack 2014〕。この長剣にともなう剣首にはタムガが描かれており、中国境外で製作されたことは明らかである。一方で璣そのものとみると、本稿の分類基準では鱗紋-2を飾る6-ii式に位置付けられ、昭帝期以降によくみられる製品の

典型例である。中国の事例からは本例が製作からあまり時間を経ずにもたらされた可能性は否定できないが、この長剣に現地で製作されたと思しき装具もともなっていることを踏まえれば、持ち込まれて一定期間を経たのちに転用された可能性もある。

上記の例に関連し、中国以西の地域でも在地で製作されたと思われる中国系長剣の玉ないし石製装具が出土しており、これらの多くは後1世紀以降の遺跡に集中する〔Trousdale 1975、村上1993〕。いずれも6形ないし7形、あるいはその在地的変容形態として解釈可能な形態を示しており、8式の影響を現状では見出すことができない。現状では前漢末以前の中国境外の様相について明らかになっていることは限られるが、伝コーカサス出土例の存在を考えると、中国製長剣ないしその装具は前漢末までにユーラシアに広く搬出され、それを模倣して後1世紀以降の玉璣は製作され始めた可能性を考えておきたい。

おわりに

以上、中国で発達した独特な剣装具である玉璣の展開を整理し、中国境外の様相についていくつかの事例をもとに展望を示した。景帝期末までに基本的なバリエーションが揃った玉璣は、紋様等の刷新をとめないながら宣帝期まで盛期を迎え、それ以降南北朝期まで製作は存続するものの新代以降は変化が停滞し、事例数も減少する。中国境外の事例に関しては点数の少なさも含め課題が残るが、中国境内の衰退傾向に入りかけた段階までに西方に流入し、以降後漢期以降の不足を補うように在地での模倣生産が開始されたと考えられる。

本稿では玉璣の属性分析に終始したため、そのほかの玉製品との関係について立ち入った検討をおこなうことができなかった。雲紋は鐙の玉装具である珌に多く用いられ、璣とは異なり前漢前期の事例に

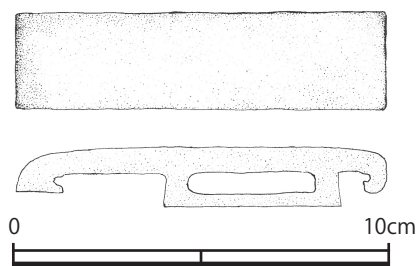


図9 ゴル・モドⅡ遺跡10号貴族墓出土玉璣

獣面紋をともなう事例もある。一方で縦横紋や斜向紋をともなうものは少ない。そのほかの玉器には縦横紋、斜向紋、雲紋、螭紋が同居する製品がそれぞれ存在し、いずれも獣面表現をともなうことがあるため、これらの紋様は本来龍など同一の空想動物の表現を構成する一部分であると考えてよい。それが璚においては時代の変化に応じて交代してゆくということは、剣装具全体での表現の役割区分に変化が生じていたことを示す。その変化はいかに、なぜ起こったのかといった問題は、これから検討してゆく必要がある。

このように本稿で示したのは玉璚の基礎的な整理作業の成果であり、その展開の詳細については今後も検討を続けてゆく必要があろう。

本稿は日本学術振興会科学研究費（若手研究）「紀元前1千年紀末の鉄製長剣の拡散からみるユーラシア交流史」（課題番号24K16192）の助成を受けたものです。

註

- 1) トゥルースデイルが紹介するCG. 65は、かつて個人蔵であったコレクション資料であるが、斜向紋-1をともなう5-ii式の事例であり、出土事例と対比しても前漢前期に遡りうる古い形態を示す。この事例には獣面紋-III類が彫刻されており、真作であれば上述した獣面紋の変遷と矛盾をきたす可能性がある。しかし本例の獣面紋は描線の太さが安定せず粗雑であり、またトゥルースデイルが指摘するように〔Trousdale 1975〕眉間の心葉状渦紋が本来中軸上にあるべきところ、粒紋を避けるようにして中軸からずれている。このことから、この獣面紋は少なくとも製作当初の設計にはなく、のちに追刻されたものと推定されるため、現状では獣面紋の変遷に関して矛盾をきたす資料とはなりえないと考える。既存の製品に獣面紋を刻

んだ可能性のある事例として、発掘事例では合浦県母猪嶺5号墓例を挙げられる。なおCG.65に関してはスミソニアン国立アジア美術館のサイトにて精彩な写真が公開されている（Accession number: S2012.9.1293、https://www.si.edu/object/sword-scab bard-slide-mask-and-raised-hexagons-arranged-grid%3Afsg_S2012.9.1293、2026.01.21 最終閲覧）。

- 2) 青銅製長剣はベトナム北部からも出土しており〔Le 1966〕、前漢の領域では南半でおもに流通していたと考えられる。
- 3) 璚の南北朝期の製作を裏付ける材料として、南齊から南梁に編年される丹陽市建山金家村大墓の磚室墓壁画が挙げられる。この壁画には剣帯をともない長剣を佩用している武人が描かれており〔南京博物院1980、町田1987〕、璚をともなう長剣の佩用形態は少なくともこの時期までは認知されていたことがわかる〔坂川・村上2025〕。この壁画が同時代の長剣佩用形態を描いたものであったとすれば、南齊期までは璚の需要があったことになる。
- 4) 最も類似する紋様構成と形態を見出せるのは漢陽陵北道陪葬15号墓例と洛陽西郊漢墓6002号墓例であるが、これらはいずれも遺構の年代に疑問があるため、ここでは西安市電信局第二長途通信大樓110号墓例によって年代を代表させておく。

《参考文献》

【日文】

- 梅原末治 1938「考古学上より観たる漢代文物の西漸」『古代北方系文物の研究』星野書店、京都
- 岡村秀典 1984「前漢鏡の様式と編年」『史林』67巻第5号、史学研究会、京都
- 柿沼陽平 2011『中国古代貨幣経済史研究』汲古書院、東京

京都大学文学部考古学教室 1950『支那古玉図録』
桑名文星堂、京都

坂川幸祐・村上由美子 2025「京都大学所蔵漢代鉄
剣について」『社会文化論集』第 21 号、島根大
学法文学部社会文化学科、松江

高久健二 1993「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』78
巻第 4 号、日本考古学会、東京

朝鮮古跡研究会編著 1934『楽浪彩篋塚』朝鮮古跡
研究会、京城

朝鮮総督府編 1927『古跡調査特別報告第四冊 楽浪
郡時代ノ遺跡』本文、朝鮮総督府、京城

東方考古学会編著 1990『陽高古城堡』六興出版、
東京

林已奈夫 1973『中国殷周時代の武器』京都大学人
文科学研究所、京都

町田章 1987『古代東アジアの装飾墓』同朋舎、京
都

村上恭通 1993「黒海北岸地域における中国製長剣」
『名大文論集』116、名古屋大学文学部、名古屋

楽浪漢墓刊行会 1979『楽浪漢墓』第一冊、真陽社、
京都

【中文】

安徽省文物考古研究所編著 2013『廬江漢墓』科学
出版社、北京

安徽省文物考古研究所・安徽省蕭縣博物館編 2008
『蕭縣漢墓』文物出版社、北京

安徽省文物考古研究所・六安市文物管理局 2012「安
徽六安市白鷺洲戦国墓 M585 の発掘」『考古』
2012 年第 11 期、考古雑誌社、北京

安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006「安
徽潜山彭嶺戦国西漢墓」『考古学報』2006 年第
2 期、考古雑誌社、北京

安徽省文物考古研究所・淮北市博物館 2007「安徽
省淮北市李樓一号、二号東漢墓」『考古』2007
年第 8 期、考古雑誌社、北京

長沙市文物考古研究所 2024「長沙市天心区桂花坪
東晋墓」『考古』2024 年第 9 期、考古雑誌社、

北京

重慶師範大学歴史与社会学院・北京大学考古文博学
院・重慶市文化遺産研究院 2014「重慶忠県両
漢墓葬」『考古』2014 年第 6 期、考古雑誌社、
北京

大連市文物考古研究所・大連営城子漢代墓地工作隊
2019「遼寧大連市営城子漢墓群 2003M76 の発
掘」『考古』2019 年第 10 期、考古雑誌社、北
京

定県博物館 1973「河北定県 43 号漢墓発掘簡報」『文
物』1973 年第 11 期、文物出版社、北京

広西合浦県博物館 2007「広西合浦県母猪嶺漢墓の
発掘」『考古』2007 年第 2 期、考古雑誌社、北
京

広州市文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所・
広東省博物館編著 1991『西漢南越王墓』文物
出版社、北京

郭沫若 1932「釈鞞」『金文叢攷』求文堂、東京

河北省文物管理处 1980「河北邢台南郊西漢墓」『文
物』1980 年第 5 期、文物出版社、北京

河南省南陽市文物考古研究所・武官大学歴史学殷考
古系編著 2011『南陽豊泰墓地』科学出版社、
北京

河南省商丘市文物管理委員会・河南省文物考古研究
所・河南省永城市文物管理委員会・閻根齊主編
2001『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社、北京

河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙
古国烏蘭巴托大学考古系編著 2020『竜出漠北
顕華章 - 高勒毛都 2 号墓地中蒙連合考古記 -』
中州古籍出版社、鄭州

河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙
古国烏蘭巴托大学考古系編著 2021「蒙古国后
杭愛省高勒毛都 2 号墓地 2017～2019 年考古初
掘簡報告」『華夏考古』2021 年第 6 期、《華夏
考古》編集部、鄭州

湖南省博物館 1984「湖南資興東漢墓」『考古学報』
1984 年第 1 期、科学出版社、北京

- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所編著 2004『長沙馬王堆二、三号漢墓』文物出版社、北京
- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 2000『長沙楚墓』文物出版社、北京
- 湖南省文物考古研究所・隨州市考古隊 2006『隨州孔家坡漢墓簡牘』文物出版社、北京
- 黃岡市博物館・湖北省文物考古研究所・湖北省京九鐵路考古隊編著 2000『羅州色与漢墓』科学出版社、北京
- 衡陽市博物館 1984「衡陽市苗圃五馬埗槽茅坪古墓發掘簡報」『考古』1984年第10期、科学出版社、北京
- 江西省博物館 1981「江西南昌地区東漢墓」『考古』1981年第5期、科学出版社、北京
- 賴有德 1981「成都東北郊西漢墓葬發掘簡報」『考古通訊』1981年第2期、科学出版社、北京
- 荊州市博物館 2020「湖北荊州市胡家草場墓地 M12 發掘簡報」『考古』2020年第2期、考古雜誌社、北京
- 遼寧省文物考古研究所編著 2013『姜屯漢墓』文物出版社、北京
- 劉雲輝編著 2009『陝西出土漢代玉器』文物出版社、北京
- 劉尊志 2011「徐州兩漢諸侯王墓研究」『考古學報』2011年第1期、考古雜誌社、北京
- 南昌漢代海昏侯国遺址博物館編著 2020『金色海昏－漢代海昏侯国歷史与文化展』文物出版社、北京
- 零陵地区文物工作隊 1990「湖南永州市鷓子山西漢”劉彊”墓」『考古』1990年第11期、科学出版社、北京
- 呂大臨 1092『考古圖』
- 洛陽市第二文物工作隊 1993「洛陽淺井頭西漢壁画墓發掘簡報」『文物』1993年第5期、文物出版社、北京
- 洛陽市文物工作隊 2004「洛陽唐宮路小学 C1M5560 戰国墓發掘簡報」『文物』2004年第7期、文物出版社、北京
- 洛陽市文物考古研究院 2016「洛陽孟津卅里鋪東漢墓發掘簡報」『文物』2016年第11号、文物出版社、北京
- 洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範学院歷史文化学院 2022「河南洛陽市朱倉村 M683 東漢墓園」『考古』2022年第6期、科学出版社、北京
- 南京博物院 1979「江蘇盱眙東陽漢墓」『考古』1979年第5期、科学出版社、北京
- 南京博物院 1980「江蘇丹陽県胡橋、建山兩座南朝墓葬」『文物』1980年第2期、文物出版社、北京、pp. 1-17
- 南京博物院・盱眙県博物館 2013「江蘇盱眙東陽漢墓群 M30 發掘簡報」『東南文化』2013年第6期、江蘇古籍出版社、南京
- 南京博物院・盱眙県文広新局 2013「江蘇盱眙県大雲山西漢江都王陵東区陪葬墓」『考古』2013年第10期、考古雜誌社、北京
- 南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴觀東晋墓」『文物』2001年第3期、文物出版社、北京
- 南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998「江蘇南京市富貴山六朝墓地發掘簡報」『考古』1998年第8期、考古雜誌社、北京
- 南陽市文物考古研究所編著 2011『南陽牛王廟漢墓考古發掘報告』文物出版社、北京
- 南陽市文物考古研究所編著 2012『南陽一中戰国秦漢墓』文物出版社、北京
- 寧夏文物考古研究所編著 2012『固原九龍山漢唐墓葬』科学出版社、北京
- 青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019「山東青島土山屯墓群四号封土与墓葬的發掘」『考古學報』2019年3期、考古雜誌社、北京
- 青海省文物考古研究所 1993『上孫家寨漢晋墓』文物出版社、北京
- 三門峽市文物工作隊 1996「河南三門峽市火電廠西漢墓」『考古』1996年第6期、科学出版社、北

- 京
 山東大學歷史文化學院・山東省文物考古研究院
 2023「山東淄博市石鼓墓地 2022 年發掘簡報」『考古』2023 年第 11 期、考古雜誌社、北京
 山東淄博市臨淄區文物局 2010「山東淄博市臨淄區
 國家村戰國及漢代墓葬」『考古』2010 年第 11 期、
 考古雜誌社、北京
 山東省青州市博物館 2007「山東青州市馬家塚子東
 漢墓的清理」『考古』2007 年第 6 期、科學出版社、
 北京
 山東省文物考古研究所 1999「山東臨淄金嶺鎮一號
 東漢墓」『考古學報』1999 年第 1 期、考古雜誌社、
 北京
 山東省文物考古研究所編著 2020『山東沿海漢代墩
 式封土墓考古報告集』文物出版社、北京
 山東省文物考古研究所・臨沂市文化广电新聞出版局
 編著 2016『臨沂洗砚池晉墓』文物出版社、北
 京
 山西省考古研究所・太原市文物管理委員會・陶正剛・
 侯毅・渠川福 1996『太原晉國趙卿墓』文物出
 版社、北京
 山西省文物考古研究所侯馬工作站 2003「山西侯馬
 西高東周祭祀遺址」『文物』2003 年第 8 期、文
 物出版社、北京
 陝西省考古研究所編 2001『漢陽陵』重慶出版社、
 重慶
 陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古發掘隊 1988
 『秦始皇兵馬俑坑 一號坑發掘報告 1974-1984』
 文物出版社、北京
 陝西省考古研究院 2020「陝西西安西咸新区石羊漢
 墓發掘簡報」『文博』2020 年第 6 期、陝西人民
 出版社、西安
 陝西省考古研究院・楊凌區文物管理所 2018『郃城
 漢墓』上海古籍出版社、上海
 四川大學考古文博學院・成都文物考古研究所 2024
 「成都市高新區貴家官山 M 8 和李家山 M9 的發
 掘」『考古』2024 年第 1 期、考古雜誌社、北京
 蘇文錦 1964「山東梁山柏木山的一座東漢墓」『考古』
 1964 年第 9 期、「考古」雜誌社、北京
 孫機 1985「玉具劍與璣式佩劍法」『考古』1985 年第
 1 期、科學出版社、北京
 孫機 1997『漢代物質文化資料圖說』文物出版社、
 北京
 王永波 2005『長清西漢濟北王陵』三連書店、北京
 西安市文物保護考古所 2004『西安南郊秦墓』陝西
 人民出版社、西安
 西安市文物保護考古所 2009「西安南郊荆寺二村西
 漢墓發掘簡報」『考古與文物』《考古與文物》編
 集部、西安
 西安市文物保護研究所・程林泉・張翔宇・張小麗・
 王久剛編著 2009『西安東漢墓』文物出版社、
 北京
 西安市文物保護研究所・鄭州大學考古專業・程林泉・
 韓國河・張翔宇編著 2004『長安漢墓』陝西人
 民出版社、北京
 廈門大學歷史與文化遺產學院・福建省考古研究院・
 南平市文物保護中心・浦城縣博物館 2022「福
 建浦城龍頭山遺址秦漢時期墓葬」『考古』2022
 年第 9 期、考古雜誌社、北京
 許昌市文物工作隊 2010「河南禹州市新峰墓地 M10、
 M16 發掘簡報」『考古』2010 年第 9 期、考古雜
 誌社、北京
 徐長清主編 2024『海昏侯墓出土文物研究』科學出
 版社、北京
 徐州博物館 1993「徐州後樓山西漢墓發掘報告」『文
 物』1993 年第 4 期、北京
 徐州博物館 1997「徐州西漢宛朐侯劉執墓」『文物』
 1997 年第 2 期、文物出版社、北京
 徐州市博物館 2009「江蘇徐州市大孤山二號漢墓」『考
 古』2009 年第 4 期、考古雜誌社、北京
 徐州博物館 2010「徐州拖竜山五座西漢墓的發掘」『考
 古學報』2010 年第 1 期、考古雜誌社、北京
 揚州博物館 1991「江蘇邗江縣甘泉老虎墩漢墓」『文
 物』1991 年第 10 期、文物出版社、北京

- 揚州博物館 1988「江蘇邗江姚莊 101 号西漢墓」『文物』
1988 年第 2 期、文物出版社、北京
- 揚州博物館 2000「江蘇邗江渠姚莊 102 号漢墓」『考古』
2000 年第 4 期、考古雜誌社、北京
- 沂水縣文物管理站 1985「山東沂水縣荆山漢墓」『文物』
1985 年第 5 期、文物出版社、北京
- 盱眙縣博物館 2004「江蘇東陽小雲山一號漢墓」『文物』
2004 年第 5 期、文物出版社、北京
- 鎮江博物館 1984「鎮江東吳西晉墓」『文物』1984 年
第 6 期、文物出版社、北京
- 中国国家博物館・徐州博物館編 2005『大漢楚王 徐
州西漢楚王陵墓文物集粹』中國社會科學出版社・
北京
- 中国科学院考古研究所編著 1957『長沙發掘報告』
科學出版社、北京
- 中国科学院考古研究所編著 1959a『洛陽中州路』科
學出版社、北京
- 中国科学院考古研究所編著 1959b『洛陽燒溝漢墓』
科學出版社、北京
- 中国科学院考古研究所洛陽發掘隊 1963「洛陽西郊
漢墓發掘報告」『考古學報』1963 年第 2 期、文
物出版社、北京
- 中国社会科学院考古所唐城隊 1991「西安北郊漢墓
發掘報告」『考古學報』1991 年第 2 期、考古雜
誌社、北京
- 中国社会科学院考古研究所編著 1980『滿城漢墓發
掘報告』文物出版社、北京
- 中国社会科学院考古研究所編著 1994『陝東周秦
漢墓』科學出版社、北京
- 中国社会科学院考古研究所・広州市文物管理委員会・
広州市博物館編 1981『広州漢墓』文物出版社、
北京

【その他】

- Gonthier, E., Kostov, R., Strack, E. 2014 A Han-dated
‘Hydra’- type Nephrite Scabbard Slide Found in
Chatalka (Bulgaria) : the Earliest and Most Distant
Example of Chinese Nephrite Distribution in
Europe// *ArkeoLog* No. 65 (https://www.academia.edu/9234763/A_Han_dated_hydra_type_nephrite_scabbard_slide_found_in_Chatalka_Bulgaria_the_earliest_and_most_distant_example_of_Chinese_nephrite_distribution_in_Europe、2026.01.19 最終
閲覧)
- Le Trung 1966 *Nhung ngoi mo tang thoi thuoc han o thieu duong*// *Mot So Bao Cao Ve Khao Co Hoc Viet Nam: Doi khao co xuat ban nam*, Ha Noi
- Rostovcev, M. M. 1930 *Le porte-épée des Iraniens et des Chinois// L'art byzantin chez les Slaves. Les Balkans. Premier recueil dédié à la mémoire de Théodore Uspenskij. Première partie*: P. Geuthner, Paris
- Trousdale, W. 1975 *The Long Sword and Scabbard Slide in Asia*: Smithsonian Institute Press, City of Washington
- Мижиддорж, Э. эрхэлсэн 2021 Хүннүгийн язгууртны булшны судалгаа (Балгасын Тал дахь Гол Мод-2) : “Мөнхийн Үсэг” хэвлэлийн компани, Улаанбаатар

《図版出典》

図1・2：筆者作成、図3～7・図8-2～4：表1・2参照、図8-1：山東省文物考古研究所編著 2020、図9：河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙古国烏蘭巴托大学考古系編著 2020、表1～7：参考文献より筆者作成

A Chronological Study of Chinese Jade Scabbard Slides (*Wei*)

Kosuke Sakagawa*

This paper aims at analyzing changing process of Chinese scabbard slides called “*wei* (璚)”, through reviewing Trousdale’s study, which had deep influence on studies of ancient swords around the Eurasian Continent with an overwhelming number of examples published before the number of archaeological excavations rapidly increased in China.

Wei themselves emerged around the Late Spring and Autumn Period and became basic sword equipment in the Han Dynasty, and in addition, their usage influenced that of the other parts of the Continent around the end of the 1st millennium BC. *Wei* are important artifacts in considering cultural interactions of the areas, but systematic studies about *wei* are few after Trousdale’s study, although the situation of the study dramatically changed.

This study tries to make a data base of *wei* reported by archaeological excavations in China and reviewed Trousdale’s typology and chronology based on that. This study focuses on *wei*’s side shapes, classifies them especially based on their short hook at one end, and checks their changing process by analyzing their long hook at the other end. Similarly, this paper considers changing process of *Wei*’s decorations based on that of shapes.

As a result, this study concludes that almost all *Wei*’s shapes rapidly derived by the era of *Wu Di* (武帝) at first, and variation of their decorations drastically changed after the era of *Zhao Di* (昭帝) after that, and finished the changing process at the end of the Western Han Dynasty. The people continued using *wei*, but both shapes and decorations hardly changed after the Xin Dynasty.

In addition, this paper considers reusing old *wei*’s. It was possible that some old *wei*’s were picked up and added a new decoration or used in another way, but such examples are not so many and the span until reusing were probably not so long.

*Shimane University

絵本と実物資料を組み合わせた展示手法 －企画展「ゲルと草原の物語－絵本原画と生活道具」実施報告

竹田多麻子*

はじめに

企画展「ゲルと草原の物語－絵本原画と生活道具」は、2024年12月にモンゴルの遊牧文化がユネスコの無形文化遺産に登録されたことを記念して、2025年4月26日（土）から7月6日（日）まで横浜ユーラシア文化館で開催された（図1）。本展では、日本で活躍するモンゴル人絵本作家バーサンスレン・ボロルマー氏とイチンノロブ・ガンバートル氏による絵本原画とともに、そこに描かれているさまざまな生活道具を展示して、モンゴル¹⁾の遊牧生活とチンギス・ハンの時代から現代に至るまでの歴史を紹介した。絵本を活用した展示は、2019年度に国立科学博物館の企画展「絵本でめぐる生命の旅」で、生命の進化を7冊の絵本と化石や剥製の標本資料とともにたどるというものがあるが、今回のような歴史や文化を扱った展示での絵本の本格的な活用は新たな試みといえる。絵本原画と実物資料を共に展示して、絵本から生活道具を、あるいは、生活道具を絵本から探してもらい、観覧者に気づきのきっかけを作ることを目的とした。さらに、モンゴルの遊牧文化の理解をより深めるために関連企画としてモンゴルの移動式住居ゲルの組立解体のイベントや写真展、講座、ワークショップなどを実施し体験の機会を設けた。本稿では、展示に絵本原画を使った取組と関連企画の概要を記録し、取組の成果について報告する。また、展示内容の全体像を示すため、末尾に資料目録を掲載した。

1. 絵本について

モンゴルの絵本といえばモンゴル民話『スーホの

白い馬』が有名であるが、本展では、ボロルマー氏とガンバートル氏らが手掛けた絵本を扱った。お二人はご夫婦で、妻のボロルマー氏が絵を、夫であるガンバートル氏が文章を担当して、日本で共に絵本の創作活動を行っている。二人ともウランバートル出身で、モンゴル文化芸術大学美術学部卒業後に2008年来日し、文教大学で絵本を学ばれた。特に、モンゴルの歴史や伝統的な遊牧生活、言い伝えなどをテーマにした絵本を多数出版し、海外でも多く翻訳されている。近年では、翻訳者の津田紀子氏と3人の共作で活動を行っている。

2012年以来、当館ではモンゴル関係のイベントを開館祭等で定期的に開催しており、その関連企画として中区図書館と区内のおはなし会グループことりの会の協力を得ておはなし会を実施してきた。ボロルマー氏とガンバートル氏の絵本の存在を知ったのも、おはなし会の中でモンゴルをテーマにした絵本として読まれていたからである。お二人が幼い時に暮らした草原での生活を基にした絵本は、絵と物語がかもし出す温かみが魅力であり、日本でも大変人気である。おはなし会でも子どもたちが熱心に耳を傾けるだけでなく、大人もその絵と文章に引き込まれる姿をよく目にした。

絵本の魅力の一つは、ボロルマー氏の絵にある。細部にわたって描きこまれた様々な場面は、今やモンゴルでは少なくなっている伝統的な遊牧生活を知る手がかりとなる。これらの絵本の原画を使ってモンゴルの生活を紹介すれば、遊牧生活になじみのない者でも絵本なので親しみやすく、視覚を通して理解を深められるのではないか、という発想が本展を

*TAKEDA Tamako 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

企画した原点だった。ボロルマー氏とガンバートル氏の絵本作品はあまた出版されているが、展示テーマと資料に適する絵本として、本展では、次の3冊を中心に構成を組み立てた。

- ①『ぼくのうちはゲル』 さく：バーサンスレン・ボロルマー 訳：長野ヒデ子（石風社、2006年）
- ②『モンゴル大草原 800年』イチンノロブ・ガンバートル 文 バーサンスレン・ボロルマー 絵 津田紀子 訳（福音館書店、2018年）
- ③『トヤのひっこし』イチンノロブ・ガンバートル 文 バーサンスレン・ボロルマー 絵 津田紀子 訳（福音館書店、2015年）

2. 絵本と実物資料の展示への取り組み

（1）展示構成

展示構成は3部構成とした（図2）。絵本の原画作品とその拡大印刷物を用いながら第1部では遊牧生活で使用する生活道具を紹介、第2部ではモンゴ

ルのチンギス・ハンが登場する時代から現代までの800年の歴史を扱った。第3部では、ボロルマー氏の絵画作品とともに、彼女の絵に影響を与えた「モンゴルのブリューゲル」といわれるバルドーギン・シャラヴ（1869-1939）の作品を展示した。次から各部の展示内容や絵本原画の取り扱い等を詳しく紹介していく。

（2）各部の展示方法

第1部「『ぼくのうちはゲル』一草原の遊牧生活」

絵本『ぼくのうちはゲル』（絵本①）は、四季ごとに家畜とともに移動する様子やゲルの組立、家畜の世話など、一昔前の遊牧生活の様子とその道具、民族衣装等が丁寧な描写で表されている。絵本の原画を拡大印刷して、そこに描かれている遊牧の暮らしを実物資料で補完し紹介した。使用した画像は、絵本の4頁、6頁、9頁、10-11頁、12-13頁、17頁、25頁、30-31頁の8点である。資料については、国



図3 展示室風景写真

立民族学博物館（大阪）と豊岡市立日本・モンゴル民族博物館（兵庫県豊岡市）から実際に使用された様々な生活道具を借用させていただいた。第1部は展示室入口入って左側の空間である（図3）。入口を入ってすぐの正面に家畜を連れての移動風景（13-14頁）の拡大画像とともに、ラクダの荷物用の鞍を配置した。企画当初は、展示室内に本物のゲルを展示して資料を展示するという計画も上がったが、スペースの関係で実現はできなかった。そのため、第1部では、進行方向右手の壁に、ゲルの外観を、反対側の左手の壁面ケースにはゲルの内部の様子をイメージできるように絵本の画像と資料を配置した。右手の壁面には、絵本12頁に描かれている牛糞を集めるための熊手や籠、牛車、家畜用の哺乳瓶などの実物資料を展示した（図4）。一方、左手には、通常、遊牧民のゲル内部の家具や道具の配置は決められているため、壁面ケース内もほぼ同じ順番で生活道具を展示した。内部の中心に据える仏壇など宗

教関係の資料は、生活道具とは少し異なるために最後に紹介した。絵本ではゲル内の全体の様子を描いたページが部分的にしかなかったので、18頁の画像を使用した。

解説パネルとしては、1家畜とともに移動する、2モンゴルの五畜、3家畜の恵み、4家畜を世話する、5遊牧民の食事、6仏教、7シャマニズム、を作成した。

第1部では、絵の中の道具の存在にすぐに気づく方がいる一方、気づかぬままの方もいらしたようだ。反省すべきだった点は、絵の中の道具と資料を結びつける視覚的導線が不十分だったことである。今後、展示をより楽しめるようにマークや、クイズ形式のワークシート等を使い、気づきを導けるような工夫を行いたい。

第2部『『モンゴル大草原 800 年』—モンゴルの歴史』
『モンゴル大草原 800 年』（絵本②）は、ボロルマー



図4 ゲルの外観をイメージ

氏とガンバートル氏が準備期間を含めて6年もの歳月を費やして制作された絵本である。チンギス・ハンの登場からモンゴル帝国時代、社会主義時代を経て現代までの歴史を9つの時代に分けて、800年にわたるモンゴルの歴史を紹介している。見開き1頁の中に絵巻物のように複数の場面が展開する構図が取られ、その時の人々の生活やモンゴル軍の軍隊の様子、『東方見聞録』に記されたカラコルム宮殿の様子など、それぞれの場面にプラスαの要素が加えられている。そこが、この絵本の非常に興味深い所であり、読者は何度見ても新たな発見をさせられる。また、清国から独立して首都がウランバートルに定まってからの23頁以降、その描写は定点観察のような手法が取り入れられ、時代が経るにつれて都市の様子が変遷する過程がわかるようになっている。

第2部では、9つの時代の中から6つの時代を選び、チンギス・ハン時代からのモンゴルの歴史を概観した。絵本ではもともと年代表示しかなかったた

め、次のようにその時代を表す言葉と時代を小タイトルとした。

- 1 チンギス・ハンの登場 13世紀初め（絵本② 2-3頁）
- 2 モンゴル帝国の拡大 13世紀（絵本② 6-7頁）
- 3 草原の都カラコルムの繁栄 13世紀（絵本② 10-11頁）
- 4 チベット仏教の広がり 17～19世紀（絵本② 18-19頁）
- 5 社会主義の時代へ 20世紀（絵本② 26-27頁）
- 6 民主主義の国へ 1980年代～現代（絵本② 30-31頁）

このコーナーでは絵本原画を展示したが、多くの方が見やすいように拡大画像パネルを壁面に貼り、さらに原画に描きこまれたさまざまなテーマについて説明するための絵解きパネルを作成した。このパネルは、説明する箇所を見つけやすくなるように、それ以外の部分は乳白色をかけてぼやかすように工



図5 壁面中央が原画の拡大、右が絵解きパネル

夫した（図5）。

解説パネルでは、絵本の該当ページのガンバートル氏による文章（津田紀子氏訳）とともに、その時代背景を説明した。展示資料としては、その時代を象徴するものや、絵本に描かれているものを展示した。時代1では、遊牧民の機動力となった馬の馬具、2では絵本に描かれているゲルを牽く牛車と兜、3ではモンゴル帝国時代に流通した銀錠や至元通行宝鈔等、そしてこの時代に様々な宗教がモンゴル帝国にもたらされたことを示すため、中国内蒙古自治区にある都城址のオロンスム遺跡から出土したキリスト教建築物の一部等を紹介した。4でチベット仏教の仏具とオロンスム遺跡出土の仏塔や仏像、文書、5ではレーニン像や社会主義時代のバッジ。6のコーナーでは、原画は1971—1999年の時代を描いていたため、そこに描かれている現在にも残る建物の写真をパネルにした。撮影はモンゴルに滞在中だったボロルマー氏に依頼した。モンゴルでは社会主義時代の建物が今でも多く残っているので、この現在の写真を見ながら十数年前に旅行に行かれた思い出話をされる方々も多くいらした。

絵解きパネルは、あまりなじみのないモンゴルの歴史、特にモンゴル帝国時代から現代までの歴史を理解する上で、大変役立ったようである。モンゴルに社会主義時代があったことをこの展示で初めて知ったという方もおられたが、絵本とこのパネルで自然に理解できたと感想をいただいた。アンケート結果では一番印象に残ったコーナーとして、この第2部を挙げられる方が全体の約50%に上った。

第3部「描かれたモンゴルの遊牧生活」

第3部では、『トヤのひっこし』（絵本③）の原画11枚を展示するとともに、モンゴルの近代絵画の先駆者といわれるバルドーギン・シャラヴ（1869—1939）の「馬乳酒のまつり」と「モンゴルの1日」という2つの作品を取り上げた。前者は模写作品を、後者はテーマとなる部分を拡大した画像をパネルに

して紹介した。シャラヴは、モンゴル絵画の中心が宗教画であった時代に、遊牧民たちの生活の様子を記した最初の画家である。その描写方法も1枚の画面の中に複数の出来事を描いたり、絵巻物のような連続性が表現されていたりする。人が落馬したり、つまずいたりといった滑稽な様子や風刺的な表現が見られるので、作者であるシャラヴは「モンゴルのブリューゲル」とも称されている。この特徴ある描き方は、彼の後に続いた多くの画家達に影響を与えたとされ、ボロルマー氏も以前、自分の絵画はシャラヴの描画技法の影響を受けたと語っていた。『モンゴル大草原800年』や『トヤのひっこし』は、この技法が用いられていることがよくわかる原画だったので、比較展示するためにシャラヴの作品は本展でどうしても展示したい資料の一つであった。

シャラヴの両作品は、美術作品としてだけでなく、研究者によって20世紀初頭のモンゴル人の遊牧生活や当時の風習が詳細に表された民族誌的資料としても扱われている。シャラヴの絵を展示する目的は、第1、2部で紹介した生活道具などがシャラヴ作品にも描かれているため、この第3部で観覧者自身が今まで展示された生活道具を絵の中で探してみるという気づきの場にしたいという狙いもあった。

「馬乳酒のまつり」という作品は、その年初めてのウマの搾乳を祝い、出来立ての馬乳酒²⁾を楽しむ祭りの様子が描かれている。画面中央には主要テーマである馬乳酒のまつりが描かれているが、その周りには馬乳酒にまつわる様々な出来事が記されている。例えば、画面の左下には子ウマをおとりにしたウマの乳搾り、下部中央にはオスウマの去勢や焼き印を押す様子、左上には自然の恵みに感謝するために騎乗の男性2人が9つの穴のついた匙で馬乳を天地に振りまく儀礼などである。展示資料としては、馬乳酒を作るための皮袋や儀礼用の匙、馬頭琴、シャラヴ作品にも描かれたハルハ族の女性民族衣装等を展示した。

「モンゴルの1日」は、夏の暮らしを描いた「馬

乳酒のまつり」と対をなす作品で、秋の1日を表しているといわれている。この作品のテーマは、フェルト作りや宿営地の移動とそれに伴うゲルの解体と組立という遊牧民の生活、狩猟、牧畜、農業、林業という生業、そして生命の誕生から結婚、病、死までの人の一生という3つである。本展では、特にゲルの組立解体、結婚と死の場面をパネルにして、説明をつけて紹介した。

3. 関連企画

本展では、モンゴル遊牧文化をより身近に、深く理解してもらうことを目的に会期中に講座や体験事業など様々な関連企画を実施した。

(1) 實方剛写真展「獣医師の診たモンゴル国の野生動物と遊牧民の暮らし」

横浜市在住の獣医師である實方剛氏の写真展を当館1階のギャラリー及び旧第1玄関にて開催した。實方氏は、獣医師としてモンゴル国にて野生動物の調査や遊牧民と共に家畜の健康管理などに取り組まれたほか、絶滅したモウコノウマ（モンゴル国で発見された野生馬）の野生復帰化プロジェクトにも参加され、長年モンゴルでの野生動物に係る活動に従事されてきた。ライフワークとして「獣医師の診た動物」の視点から写真を撮影されている。筆者が實方氏を存じ上げるきっかけは、2024年2月によこはま動物園ズーラシアにてモウコノウマ来園記念として開催された實方氏の写真展と講演会に参加したことであった。同園では現在3頭のモウコノウマが飼育されており、国内では他に多摩動物公園で飼育が行われている。

企画展では遊牧生活の様子は絵本原画の中で目にすることができるが、現代遊牧民の生活をよりリアルに理解するには写真で紹介する必要があると思います。實方氏に当館での写真展実施を依頼した。ボロルマー氏の『トヤのひっこし』原画には多くの野生動物も描かれている。写真展のテーマは實方氏と相談の上、野生動物と遊牧民の暮らしという設定にし、

31点の写真作品を展示した。写真作品のほか、モウコノウマが原画に描かれているため、よこはま動物園ズーラシアから飼育中のモウコノウマの情報や画像をご提供いただき、パネルで紹介した。会期中、實方氏はボランティアでご自身の写真を観覧者に解説してくださった（図6）。遊牧民と生活を共にしてきた氏の解説は観覧者の遊牧生活に対する興味や理解を促進させ、展示への満足度を高めた。

(2) イベント「ゲルに集まれ！」

5月10日に当館に隣接する横浜市情報文化センター1階の情文プラザで実施した。内容としては①ゲルの組立・解体（参加者552人）②モンゴル絵本のおはなし会（参加者102人）③モンゴルの民族衣装試着体験（参加者217人）を行った。

ゲルの組立解体は、公益社団法人日本モンゴル協会の協力を得て行った。午前9時頃から組立を開始し、お昼頃に完成。午後3時30分頃から解体。途中に同協会理事長の窪田新一先生によりゲルやモンゴルについて複数回解説をいただいた。ゲル組立の一部では、見学者も参加し、素材の感触や重さを実感してもらった（図7）。

モンゴル絵本のおはなし会では、ボロルマー氏とガンバートル氏の絵本作品をガンバートル氏がモンゴル語で読み、日本語を市内中区の読み聞かせグループ「ことりの会」が行った。小学校低学年の児童から大人まで参加していたが、初めて聞くモンゴル語の響きに皆熱心に耳を傾けていた。ボロルマー氏にはモンゴルの手遊びなどを紹介いただき、当館と同じ区内にある中図書館からは図書館で読めるモンゴルの絵本を紹介いただいた（図8）。

「モンゴルの民族衣装試着体験」では、子どもだけでなく大人も試着を楽しみ、家族で体験する方もいた。試着することで、モンゴルの衣装が気候や生活に適したものであることを感じられていた。実施には横浜市歴史博物館の活動ボランティアの協力を得た。



図6 實方氏による写真展の解説



図7 イベント「ゲルに集まれ!」研究者によるゲルの説明



図8 イベント「ゲルに集まれ！」皆でモンゴルの手遊びを楽しむ

実施日は雨天予報だったため、前日に急遽、会場を室内に変更したが、小学校保護者用配信「すぐる」の効果や絵本作家による集客もあり、多くの参加者が集まり、モンゴルの生活文化を様々な形で体験し楽しんでいた。

(3) 関連講座「現代のモンゴルを知る」

企画展では、今から一昔前のモンゴルの生活文化を扱ったため、現代のモンゴルを十分に伝えられることができない。そのため、モンゴルをフィールドとする文化人類学研究者による講座を横浜市開港記念会館にて2回実施した。

第1回「モンゴル遊牧民の生活世界にあるモノー利用をめぐる交渉術」6月15日(日)

講師：堀田あゆみ氏(立命館大学サステイナビリティ学研究センター客員研究員)

第2回「現代モンゴルにおける仏教実践と化身ラマ」6月21日(土)

講師：島村一平(国立民族学博物館教授)

(4) トークイベント「『モンゴル大草原 800年』ができるまで」

絵本作家ボロルマー氏とガンバートル氏によるトークイベントを5月11日に横浜市開港記念館にて実施した。ボロルマー氏が日本語で発表し、ガンバートル氏のモンゴル語を通訳してくださった。発表では、絵本の製作秘話と、幼い時に体験した遊牧生活や社会主義時代の実体験などを語っていただいた。

その他、会期中にギャラリートーク(展示解説)とモンゴルの民族衣装試着体験を定期的に行なった。

4. 展示の成果

近年、絵本は子供のための読み物としてだけでなく、様々な役割をもつメディアとしてとらえられて

きている。2025年2月に刊行された、東京と安曇野のちひろ美術館設立者である松本猛氏が著した『絵本とは何か—起源から表現の可能性まで』³⁾で、歴史を描くうえで、絵本という形態が文章では書けない視覚情報を伝えられる優れた媒体⁴⁾と評価し、絵本の可能性について、視覚情報が大きな役割を果たす絵本は、世界の文化を伝える力を持ち⁵⁾、さまざまな人種や民族や国・地域の文化の懸け橋と役割を担うことが期待される⁶⁾、と今後の多文化共生の時代に絵本が果たす役割を示している。

本展のアンケート調査によると、展示に対する満足度は99.6%に達し、観覧者からは絵を通して遊牧生活の様子を知り、子どもと大人両方が興味を持つてみる事ができた、モンゴルの歴史と文化を絵本と実物資料で多角的に見られ、理解が深まった、という感想を多くいただいた。また、第2弾を望む声や他の国の絵本でもやってほしいという希望が寄せられた。このような観覧者の声は、本展が絵本の可能性の一つを具体的に示せたのではないかと考えている。絵本と実物資料を組み合わせて展示することは、絵本の展示、ひいては博物館の展示にとって新たな展示手法である。そして、多文化共生が重要となる今、異なる文化を理解する上で有効な手段であることを認識した。

今回の経験を踏まえて、絵本を使った手法を継続して、今後もユーラシア諸地域の文化を視覚的にわかりやすく紹介する展示を心がけていきたい。

謝辞

本展の実施にあたっては、多くの博物館及び関係者の方々に多大なご協力を頂きました。特に、貴重な原画をお貸しくださったパーサンスレン・ボロルマー氏とイチンノロブ・ガンバートル氏、津田紀子氏、企画段階からご指導とご助言を賜りました小長

谷有紀先生と堀田あゆみ先生、堀田先生には解説パネルやキャプション等の監修も頂きました。ここに記して深く感謝申し上げます。また、本展の開催にあたり、絵本の掲載等にご協力くださった福音館書店および石風社の皆様にも厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 本展で用いる「モンゴル」とは、モンゴル高原を対象としたが、第2部の「『モンゴル大草原800年』—モンゴルの歴史」ではモンゴル国の歴史を扱った。
- 2) 馬乳酒は馬の乳を原料とした発酵酒。モンゴル人にとって伝統的な飲み物。
- 3) 松本猛著『絵本とは何か—起源から表現の可能性まで』岩波書店、2025年
- 4) 松本 2025. P. 204
- 5) 松本 2025. P. 217
- 6) 松本 2025. P. 217

《参考文献》

- 小長谷有紀著『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社、1996年
- 小長谷有紀・楊海英編著『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』千里文化財団、1998年
- 堀田あゆみ著『モンゴル遊牧民 エンフバト一家のモノ語り』TEXNAI、2020年
- 松本猛著『絵本とは何か—起源から表現の可能性まで』岩波書店、2025年
- パーサンスレン・ボロルマー、イチンノロブ・ガンバートル著・津田紀子訳 2025「絵本でつなぐモンゴルと日本—『ゲルと草原の物語』に寄せて」『News from Eurasia: 横浜ユーラシア文化館ニュース』横浜ユーラシア文化館、第41号 4-5頁

Combining Picture Books and Museum Objects: A Report on the Special Exhibition “Tales of Mongolian Ger and Grasslands”

Tamako Takeda



図1 展示チラシ表面（右）と裏面（左） 表と裏をつなげると絵本『モンゴル大草原 800年』の表紙作品になる



图2 企画展示室図面

企画展「ゲルと草原の物語—絵本原画と生活道具」

資料目録

	資料名	地域・民族	時代	所蔵先 (所蔵番号)
第1章 『ぼくのうちはゲル』—草原の遊牧生活				
1	男性用帽子	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0033639)
2	男性用長衣	中国 内モンゴル自治区/民族 モンゴル	1989 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0170677)
3	男性用腰帯	中国 内モンゴル自治区/民族 モンゴル	1989 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0170678)
4	男性用靴	地域 モンゴル国/民族 プリヤート	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203451)
5	女性用靴	地域 モンゴル国/民族 プリヤート	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203462)
6	ラクダの荷物用鞍	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0063976)
7	搾乳用桶	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201917)
8	搾乳用桶	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0205609)
9	蓋付き桶	地域 ロシア/民族 プリヤート	1981 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0088387)
10	干しチーズ (模型)			豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
11	チーズ乾燥用板	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0205672)
12	馬乳酒入れ	地域 中国新疆ウイグル自治区/民族 モンゴル	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0207529)
13	磚茶	地域 中国内モンゴル自治区 またはモンゴル国/民族 モンゴルか	1975 年受入	国立民族学博物館蔵 (K0004290)
14	鍋		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
15	五徳	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201981)
16	火ばさみ	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201980)
17	お茶用 水差し	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0063909)
18	お茶用 水差し		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
19	椀		20 世紀収集	横浜ユーラシア文化館蔵
20	銀椀		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
21	シャガイ	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0205547)
22	鐙	中国 河北省 張家口/民族 モンゴル	1982 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0101424)
23	ウマの汗取りペラ	地域 モンゴル国/民族 ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0033669)
24	仏棚	地域 モンゴル国	2011 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0269573)
25	灯明皿	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187302 ~ H0187305、H0187307)
26	灯明皿	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187303)
27	灯明皿	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187304)
28	灯明皿	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187305)
29	灯明皿	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187307)
30	祈祷用具 (マニ車)	地域 ロシア/民族 プリヤート	1981 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0088389)
31	祈祷用具 (マニ車)	地域 ロシア/民族 プリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187291)

32	経典		地域	モンゴル国/民族	モンゴル	1996 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0203558)
33	タンカ		地域	ロシア/民族	ブリヤート	1992 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0187256)
34	携帯用護符		地域	モンゴル国			個人蔵
35	香炉		中国	内モンゴル自治区/民族	モンゴル	1980 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0086879)
36	香		地域	モンゴル国か/民族	モンゴルか	2016 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0279202)
37	香水入れ		地域	モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0201943)
38	精霊像 魚 (複製)		地域	ロシア/民族	ブリヤート	1979 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0065658)
39	精霊像 人 (複製)		地域	ロシア/民族	ブリヤート	1979 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0065654)
40	嗅ぎ煙草入れ					20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
41	嗅ぎ煙草入れ		地域	中国	内モンゴル自治区/民族	モンゴル	国立民族学博物館蔵 (H0170700)
42	嗅ぎ煙草入れ		地域	モンゴル国		2011 年受入	国立民族学博物館蔵 (H0269987)
43	嗅ぎ煙草入れ用袋		地域	モンゴル国/民族	モンゴル	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203481)
44	煙管					20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
45	煙管入れ		中国	内モンゴル自治区/民族	モンゴル	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201505)
46	火打ち具					20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
47	子ヒツジ用哺乳瓶		地域	中国内モンゴル自治区/民族	モンゴル	1989 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0170671)
48	子ヒツジ用哺乳瓶		地域	モンゴル国		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
49	餌箱		地域	中国新疆ウイグル自治区/民族	モンゴル	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0207532)
50	牛糞 (模型)						豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
51	牛糞用熊手		地域	モンゴル国/民族	ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0063980)
52	牛糞籠		地域	モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0202019)
53	牛車 (玩具)		地域	モンゴル国/民族	ハルハ	1997 収集	国立民族学博物館蔵 (H0205618)
第2章 『モンゴル大草原 800 年』—モンゴルの歴史							
54	馬用の鞍		中国	河北省 張家口/民族	モンゴル	1982 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0101421)
55	ハミ		地域	中国河北省張家口/民族	モンゴル	1982 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0101429, H0101430)
56	ハミ		中国			戦国時代 (紀元前 5 ～前 3 世紀)	横浜ユーラシア文化館蔵
57	ゲルをひく牛車 (模型)		地域	モンゴル国/民族	ハルハ	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0205655)
58	鉄製胄		地域	中国内モンゴル自治区		1935 年収集か	東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.84)
59	成吉思皇帝聖旨牌子 (写真パネル)		中国	・旧熱河省出土		13 世紀	天理大学附属天理参考館
60	銀錠		中国			元 13 世紀	日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵 (IB チウ n 1 39-1)
61	銀錠		中国			元 天暦 2 年 (1329) 鑄造	日本銀行金融研究所貨幣博物館蔵 (IB チウ n 1 39-5)
62	至元通行宝鈔 (複製)		中国			元 13 世紀 至元 24 年 (1287 年)	台東区立書道博物館蔵
63	「蒙古軍万古府徑理司印」朱文方印		中国			元 13 世紀	台東区立書道博物館蔵
64	白釉丸瓦		中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡			東京大学東洋文化研究所蔵 (10095,10096)
65	塑造人物像頭部		中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡			東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.135)

66	塑造人物像胴部	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	中国内モンゴル自治区	東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.134)
67	彩釉龍文軒丸瓦	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	中国内モンゴル自治区	東京大学東洋文化研究所蔵 (10083)
68	鬼面文軒丸瓦	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	中国内モンゴル自治区	東京大学東洋文化研究所蔵 (10001)
69	磚	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	中国内モンゴル自治区	東京大学東洋文化研究所蔵 (177.10367)
70	磚	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	中国内モンゴル自治区	東京大学東洋文化研究所蔵 (10331.10330)
71	僧侶用帽子	地域 モンゴル国/民族	モンゴル	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203379)
72	僧侶用帽子	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203403)
73	宗教儀礼用シンバル (ツァン)	地域 中国内モンゴル自治区/民族	モンゴル	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0207841)
74	宗教儀礼用ラッパ	地域 中国内モンゴル自治区/民族	モンゴル	1997 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0207842)
75	数珠	地域 ロシア/民族	ブリヤート	1981 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0088411)
76	オロンスム文書 (モンゴル語仏典)	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡	16-17 世紀	横浜ユーラシア文化館蔵 (03-MS0006)
77	泥塔	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡		東京大学総合研究博物館蔵 (EG03)
78	磚仏	中国内モンゴル自治区	オロンスム遺跡		東京大学総合研究博物館蔵 (G03.12)
79	磚仏				東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.14)
80	磚仏				東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.15)
81	磚仏				東京大学総合研究博物館蔵 (EG03.17)
82	磚仏				東京大学東洋文化研究所蔵 (2127)
83	レーニン像	地域 モンゴル国			個人蔵
84	書籍『日本人のことば』				個人蔵
85	詩集『お父さんお母さんぼく』				個人蔵
86	O. ソドノムドルジの全集				個人蔵
87	ピオネール・バッジ	地域 モンゴル国		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
88	ピオネール・バッジ	地域 モンゴル国		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
第 3 章 描かれたモンゴルの遊牧生活					
89	馬乳酒用 袋	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201985)
90	馬乳酒用攪拌棒	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201986)
91	儀礼用匙	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201966)
92	馬乳酒用椀	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1995 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0201975)
93	木碗	地域 モンゴル国		20 世紀収集	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
94	馬頭琴	地域 モンゴル国ウランバートル市		1960 年代制作	豊岡市立日本・モンゴル民族博物館蔵
95	「馬乳酒のまつり」(模写) B. シャラヴ (1869-1939) 作	モンゴル		1910 年代 (模写 2001 年制作)	国立民族学博物館蔵 (原資料はモンゴル国立ザナバザル記念美術館が所蔵) (H0224334)
96	「モンゴルの 1 日」(模写・複製) B. シャラヴ (1869-1939) 作	モンゴル		1910 年代 (模写 2001 年制作)	国立民族学博物館蔵 (原資料はモンゴル国立ザナバザル記念美術館が所蔵) (H0224333)
97	女性用上衣	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203388)
98	女性用上着	地域 モンゴル国/民族	ハルハ	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203386)

99	女性用頭飾り	地域	モンゴル国／民族	ハルハ	1978 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0063903)		
100	男女兼用帽子	地域	モンゴル国／民族	ハルハ	1996 年収集	国立民族学博物館蔵 (H0203449)		
絵本 原画								
		書名			書誌情報			
		所蔵						
101	原画『モンゴル大草原 800 年』表・裏紙	イチンノロブ・ガンバートル 文 バーサンスレン・ボロルマー 絵 津田紀子 訳／福音館書店／2018 年			個人蔵			
102	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.2-3				個人蔵			
103	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.4-5				個人蔵			
104	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.6-7				個人蔵			
105	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.10-11				個人蔵			
106	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.18-19				個人蔵			
107	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.26-27				個人蔵			
108	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.28-29				個人蔵			
109	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.30-31				個人蔵			
110	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.32-33				個人蔵			
111	原画『モンゴル大草原 800 年』 pp.36-37				個人蔵			
112	原画『トヤのひっこし』表・裏紙				個人蔵			
113	原画『トヤのひっこし』 pp.2-3				個人蔵			
114	原画『トヤのひっこし』 pp.8-9				個人蔵			
115	原画『トヤのひっこし』 pp.10-11	個人蔵						
116	原画『トヤのひっこし』 pp.14-15	個人蔵						
117	原画『トヤのひっこし』 pp.16-17	個人蔵						
118	原画『トヤのひっこし』 pp.20-21	個人蔵						
119	原画『トヤのひっこし』 pp.22-23	個人蔵						
120	原画『トヤのひっこし』 pp.24-25	個人蔵						
121	原画『トヤのひっこし』 pp.26-27	個人蔵						
122	原画『トヤのひっこし』 pp.30-31	個人蔵						
123	原画『トヤのひっこし』 pp.32	個人蔵						
124	原画『トヤのひっこし』 pp.26-30	個人蔵						
原画プリント								
バーサンスレン・ボロルマー 作 長野ヒデ子 訳／石風社／2006 年							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	
							安曇野ちひろ美術館	

ブハラ・オアシス出土ガラスの調査報告

竹田多麻子¹・細川 貴子²

1. はじめに

ガラス製作は5000年程前の西アジアに起源を持ち、紀元前1世紀中頃には地中海地域で吹き技法が発明された。ガラス製品は交易を通して広範囲にもたらされ、その技法は東西に伝播した。中央アジアにガラスが流入したのは、アラビア半島で興ったイスラームの勢力が侵攻してからといわれている。この地のイスラーム化とともに、西から新しい物質文化がもたらされたが、その一つがガラスであった。8世紀後半からガラス器が普及したと考えられている。

筆者らはウズベキスタンの南部に位置するブハラ・オアシスで出土するガラス遺物を調査する機会を得たことから、中央アジアにおけるガラスの受容と発展の解明を目的に2016年から海外調査を実施している。特に、2023年と2025年には公益財団法人美術工芸振興佐藤基金より助成金を得て、対象地域を広げて調査を行うことができた。本稿では2023～2025年に行った調査概要の一部を報告する。

研究の目的

中央アジアにおけるガラス製品の調査研究は進んでおらず、生産や流通など不明な部分が多い。それは、ソ連邦時代から仏教遺跡などの古代遺跡の発掘調査が大いに進められた一方、イスラーム期の遺跡はあまり注目されず発掘事例が少ないためである。また、ソビエト連邦時代の資料が言語的な問題などから入手しづらく、発掘従事者のガラスに対する知識不足や関心の薄さから出土していても報告がなされていないことも考えられる。

そこで本研究では、イスラームの時代になって初

めて中央アジアで取り入れられたガラスがブハラ・オアシスでどのように受容され、在地の物質文化に影響を与え、発展したのかを探り、中央アジアにおけるガラス製造及び流通、交易などの実態を解明するために、考古学と文化財科学による学際的な調査研究を実施している。

調査の経緯

ブハラ・オアシスはウズベキスタン南部、アムダリヤ川とシルダリヤ川に挟まれたトランスオクシアナに位置し、オアシスがザラフシャン川下流域に広がっている。ブハラは古くからシルクロード交易の要衝の地であり、交易を担ったソグド商人たちの地としても有名である。イスラーム化されると、9世紀後半からイラン・イスラーム文化が花開き、13世紀のモンゴル襲来まで学問と文化の中心地として繁栄した。

ロッコ・ランテ博士が率いるフランスとウズベキスタンのブハラ・オアシス考古調査団 The Franco-Uzbek Archaeological Mission in the Oasis of Bukhara (以下、MAFOUB) は、ブハラ・オアシスで2009年から発掘調査を実施している。同オアシス内のパイケンド遺跡やブハラ遺跡など複数の遺跡で発掘調査を行い、ブハラ・オアシスの人口動態、都市の成り立ち、イラン・ホラーサーン文化との影響関係などの研究を進めている。

ガラスについては、2016年から年代学、様式学などの考古学的アプローチに加え、文化財科学の手法を取り入れながら、調査を進めている。これまでに約700点のガラス容器、原料塊などの製造関連遺物を登録した¹。その調査成果の詳細は、『The

¹TAKEDA Tamako 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

²HOSOKAWA Takako 東京学芸大学個人研究員

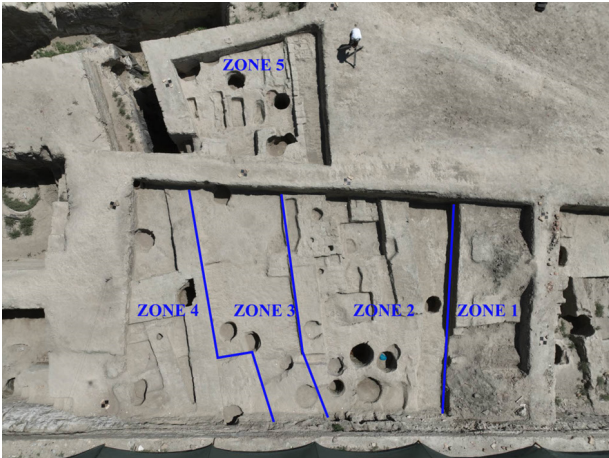


図1 プラハ遺跡 D 地区の全景 (MAFOUB 提供)



図2 D 地区の向いはカラーンモスク (竹田撮影)

Oasis of Bukhara』の第3巻にあたる Material Culture, Socio-territorial Features, Archaeozoology and Archaeometry² に収録されている。

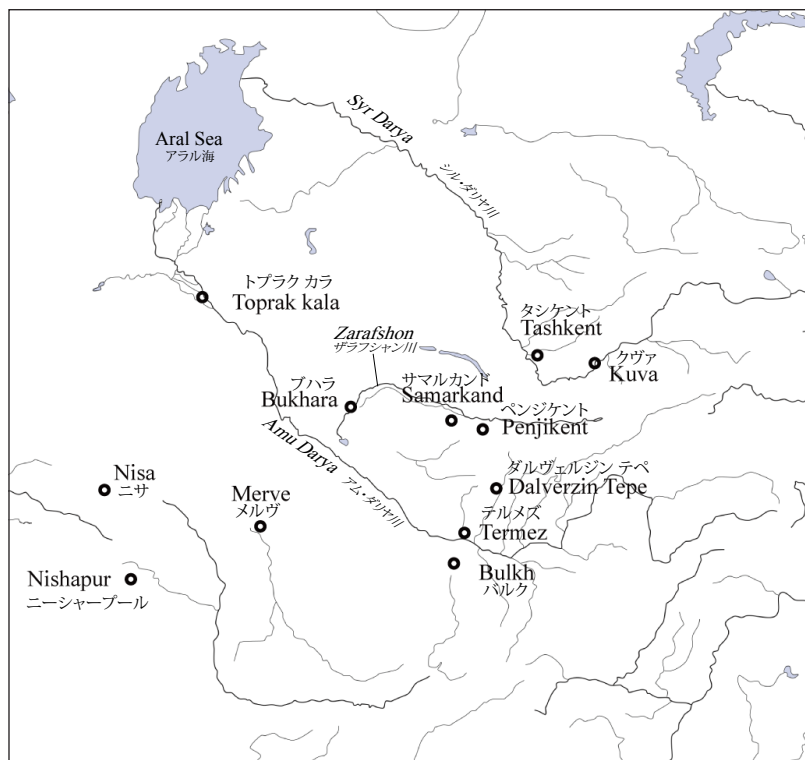
2. 調査内容

ブハラ・オアシス出土のガラス

MAFOUB は、2017 年からブハラ旧市街にあるアルク城内のシタデル（城塞）と城の隣に位置する

シャフリスタン（市街地）からなるブハラ遺跡の発掘調査を行っている。

2023 年度からはシャフリスタン、D 地区の発掘が開始された。第1層が12世紀以降、カラハン朝末期（2023年調査）にあたる。第1層と2層の間に人骨が出土していることからネクロポリス（墓地）が存在した可能性があり、居住地は一度放棄されたようである。第2層は11世紀～12世紀、第3層は



地図
(竹田・細川作成)

9世紀～10世紀、サーマン朝期に相当する。

2024年は第2層を中心に発掘調査が行われ、瓶、ビーカー、壺、ゴブレットの生活容器と窓ガラスが出土した。このうち、装飾ガラス片と器形の復元が可能である破片を23点登録し、素材、器形、装飾別に詳細な分類を行い、実測図と写真撮影を行った。

出土遺物の中で特徴的なガラス容器を以下に紹介する。

紐装飾が施されたゴブレットが2点出土した。BBG280(図3-1、図4-5)は無色透明で、口縁部片、胴部片、脚部片から成る。容器は円錐形で、容器と脚の比率はおおよそ3:1である。容器胴部にはらせん状の紐装飾、容器底部に細い紐を何重にも巻き付けた円盤状の紐装飾が施されている。BBG281(図3-2)は、銀化が激しいが無色透明の素材であると考えられる。容器底部と脚部が出土しているが、円盤状の装飾が見られることからBBG280と同様の器形であると想定できる。

類似するゴブレットは、カザフスタンのオタル(Otar)、タラズ(Taraz)、タジキスタンのペンジケント(Penjikent)、ウズベキスタンのクヴァ(Kuva)など中央アジア各地から出土している³。クヴァ遺跡のゴミ溜め層からは、類似するゴブレットが数点出土しており、層位と陶磁器などの共伴関係から11世紀ごろに製造されたと考えられている。中央アジアでは10世紀以降、円盤型の装飾を容器下部に施すなど独特の器形をしたゴブレットが製造、流通するようになった。D地区から出土したゴブレットも、中央アジア特有の器形と装飾が施されており、層位、共伴する陶器やコインから11世紀以降に製造された可能性が高い⁴。

ゴミ溜め層と考えられるピットUS842からは2つの大型瓶が出土した。BBG283は、淡緑色、気泡が多い素材から在地産であると考えられる。首部には幅広の波状の紐装飾が施されている(図3-3、図4-10)。口縁から肩部にかけて、非常に厚みがある。口縁は、冷却後に吹き管から切り離された

だけで、焼き直しなどの処理は行われていない。

BBG284は盤口型の口縁を持ち、肩部が張り出した円筒形の胴部を持つ瓶で、高さは20cm超と推定される。淡青緑の素材で気泡が多く、在地産であると考えられる(図3-3、図4-9)。このような瓶はイスラーム文化圏を通して一般的な器形であり、各地の遺跡で出土事例が多いが、時代が下るにしたがって大型化したものが見られるようになる⁵。

カット装飾ガラスは3点出土した(図4-1～3)。BBG279(図4-2)は小瓶の肩部と想定される。BBG271は(図4-1)胴部片であるが、その形状から球状の胴部をもつ瓶と考えられる。カット装飾が施されたガラス片はいずれも無色透明で高品質の素材であることからイラン地域から輸入された可能性が高い。

リブ状の型装飾は、2点出土した。BBG278(図4-4)は、ビーカーと想定される。類似品がタシケント近郊のカヴァルドン(Kavardon)遺跡から報告されている。リブ状の型装飾ガラスはプハラ・オアシスでは一般的な装飾技法の1つであり、10世紀～11世紀の中央アジアの多くの遺跡で確認することができる。その他、日常の食器類である碗、壺、瓶、水注の把手に加え、窓ガラス(図5-13)などが出土した。窓ガラスはプハラ・オアシス内のすべての遺跡から出土している。厚みが1ミリ程度で、円形であることから輸送に適しておらず、在地産と考えられる。



1 BBG280



2 BBG281



3 BBG284



4 BBG283

図3 ブラハ遺跡D地区出土のガラス（細川撮影）

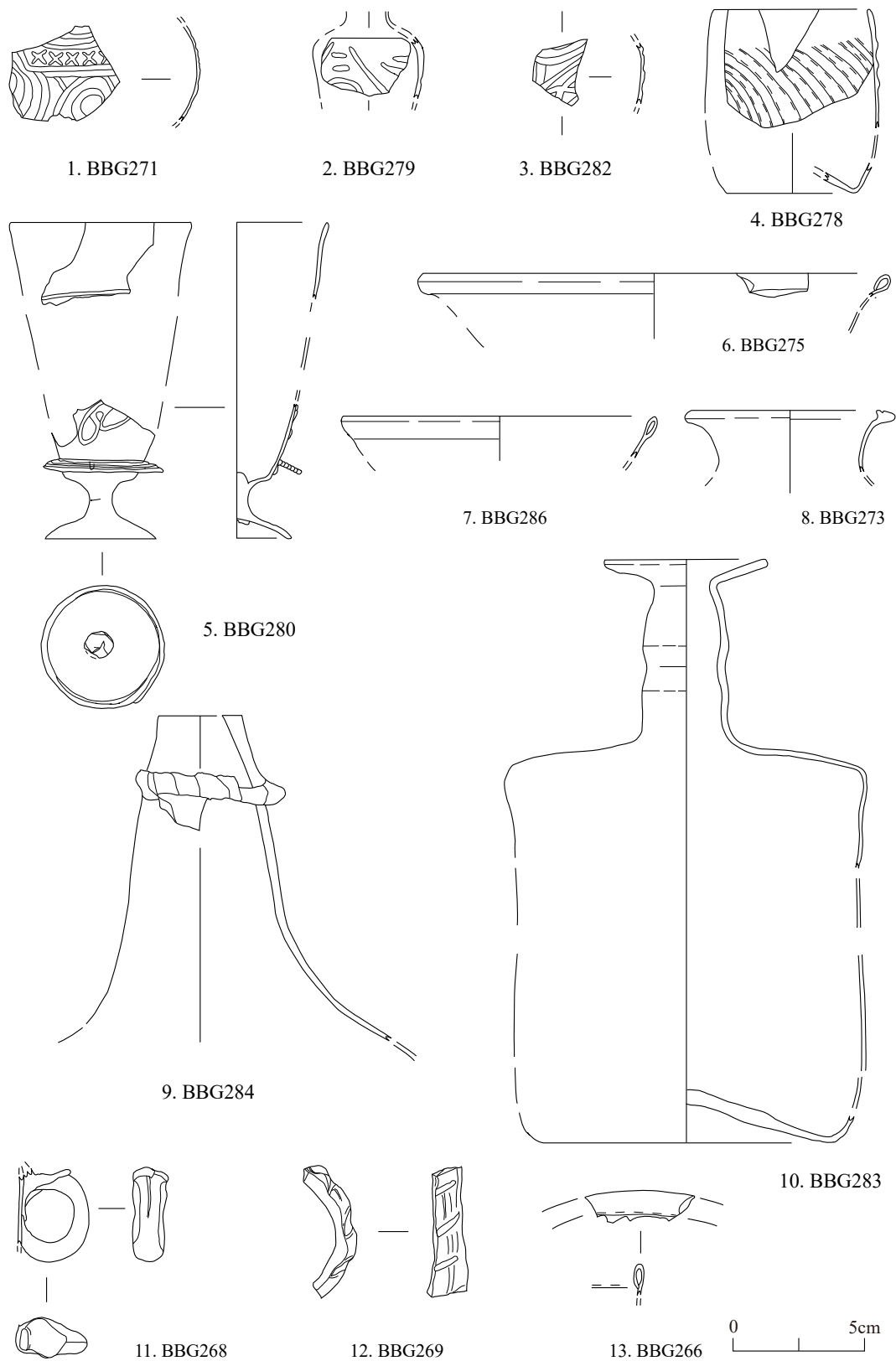


図4 プハラ遺跡D地区出土のガラス（細川作成）

カフィル・カラ遺跡出土のガラス

カフィル・カラ遺跡は、サマルカンド市内のアフラシアブから南東へ10kmのあたりに位置する。2013年度から日本・ウズベキスタンの共同調査隊がイスラーム以前の中央アジアの歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的としてカフィル・カラ遺跡などの発掘調査を継続的に実施している。

カフィル・カラ遺跡は、小高い丘上に75km×75kmのほぼ正方形のシタデル（城塞）があり、その周りにシャフリスタンとラバドという居住区が構成され、総面積は16haである（図5）。2017年にはシタデル最奥部の部屋からゾロアスター教の女神ナナを中心に、シルクロードの様々な楽器を持った礼拝者たちが表された木彫り板が炭化した状態で発見されている。このような完全な形で発見された例は、ウズベキスタン国内のみならず中央アジア全体においても初めてのことであった⁶。

ガラスはこの遺跡のシタデル地区とシャフリスタン地区から出土した。ブハラ・オアシスの各遺跡から出土したガラス器との比較を行うために、2023年9月に、カフィル・カラ遺跡をはじめとするサマルカンド市内から出土したガラス42点について現地調査を行った。多くはガラス器片で、初期イスラーム時代の装飾である紐、つまみ、型、ピンサーといった技法が施されている。

特に注目されるガラスは以下の2点である。1点

は、シタデルから出土した、太い紐装飾の上にスタンプで文様が付けられたガラス片である。同様の破片がブハラ・オアシスのパイケンド遺跡で796年の火災層下部から出土している。これら2つの破片は、ダルヴェルジン・テパで出土した人面が貼り付けられた紐装飾瓶と同様の装飾技法が用いられている⁷。ロサンゼルス美術館（LACMA）にも類似の人面瓶が所蔵されており、いずれの容器もイスラーム初期の（7-8世紀）製造と考えられている。もう1点は、シャフリスタンのトレンチ9から出土した濃い青緑色の紐装飾が施された淡青緑色のゴブレットである（図6）。口縁部から胴部の一部は欠けており、残存高約6cmである。杯の周りには紐装飾でUの形が施され、脚の土台部分にはハサミのようなもので切り込みがされている。ゴブレットは、ビザンツ時代に盛んに製造され、初期イスラーム時代においても前時代の伝統的な特徴を持つゴブレットが出土するが、アッバース朝からファーティマ朝期にかけて出土量は減少していく⁸。上記のゴブレットは、器形と装飾等から、在地産ではなく、東地中海地域で製作され、アラブ軍が侵攻した際にもたらされたと考えられる。



図5 カフィル・カラ遺跡のシタデル（撮影：竹田）



図6 ゴブレット（日本・ウズベキスタン共同調査隊の許可を得て竹田撮影）

この調査では、カフィル・カラなど周辺からの遺跡から、紐やつまみ装飾などパイケンド遺跡出土ガラスと同じく初期イスラーム時代のガラスが出土しており、ブハラ・オアシス以外のオアシスにもガラスが流通していたことを確認できた。

底部ポンテ痕の観察と考察

出土するガラス器外面の底部のほとんどに必ず円形で窪んだ、あるいは出べそのような痕が付いており、これをポンテ痕と呼んでいる。吹き技法では、熱したガラスを吹き竿の先端に取って膨らませた後に口縁部の処理や装飾を施すために、膨らんだガラスを吹き竿から切り離す必要がある。そのため、ポンテ竿と呼ばれる金属製の長い丸棒の先端に少量のガラスをつけ、先ほどの膨らませたガラスに接着させてガラス器をポンテ竿の方へ移しとる。その時に容器底部の中央あたりにできる傷痕を、ポンテ痕と称している。

このポンテ痕の基本的な形状は円形である。竿の先端についていたガラスが竿で押し付けられ、はみ出すことで痕が丸い形となるものや（ノーマルポンテ）や、真ん中に穴の開いた筒状やリング状になったもの（リングポンテ）の2つに分類できる。また、ポンテ痕を研磨してきれいに処理している例もある。

2009年から開始されてきたブハラ・オアシス遺跡のガラス調査においてパイケンド遺跡では、リング状のポンテ痕が半数にみられた。通常のイスラームガラスと比べると、このような現象は珍しく、これは中央アジアで製造されるガラスの地域性を示す特徴の一つとして注目されている⁹。

・観察

2023年の調査では、ブハラ遺跡から出土した51点の底部片にポンテ痕が確認され、詳細な観察を行った。内訳は、ノーマルポンテ20点、リングポンテ22点、銀化などで不明が3点、欠損が1点、研磨によってポンテ痕のないものが5点だった。多

くが破片であるため、容器の大きさとポンテ竿の直径の関連性はわからないが、ポンテ痕の直径は、約1cm～2cmである。

ノーマルポンテ痕は、形が丸くなるほか、竿のガラスがうまく外せた場合は底部の中央はなめらかな窪みとなる（図7）。リングポンテはきれいなリング状の形（図8a）になっているものや、反対にガラスをつけすぎたために崩れた形になっているものもある（図8b, c）。リングポンテで注目したいのは、痕の中心に金属物が付着していることである。共同研究者である東京学芸大学准教授の新免歳靖氏が実施した化学分析では、この金属物は鉄によるものという結果であったが、なぜ鉄が付着しているかは不明である。

・考察

リングポンテ痕が独特の形状をしていることから、特殊な器具、あるいはガラスの共竿を使用したのではないかと、様々な可能性を共同研究者たちと議論してきた。しかし、ローマガラス史研究者の島田守氏の論文¹⁰によると、古代のガラス容器には環状のポンテ痕が残されており、ポンテ竿の代わりに吹き竿を使用していたと考えられているという。環状のポンテ痕の初見は初期ローマ時代の45年以前に見られ、1世紀後半になって棒状のポンテ痕の使用が見られる。また、中東各地のガラス窯を見学



図7 ノーマルポンテ痕（竹田撮影）

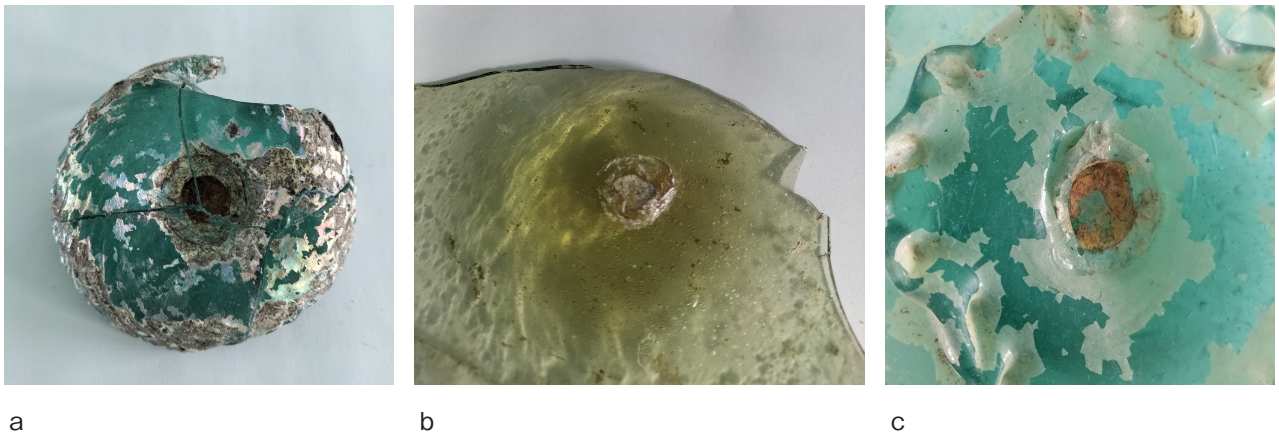


図8 リングポンテ痕（竹田撮影）

した際には、現代においてもレバノンやシリアでは吹き竿をポンテ竿代わりに使用していたと報告し、職人一人での作業の場合は、効率が良いのは吹き竿を流用する方法だと考察している。このような事例から、リングポンテ痕が吹き竿の流用によるものであった可能性は大きく、このポンテ痕が中央アジアのガラスの特徴とは必ずしも言い切れないことがわかった。しかし、パイケンド遺跡出土のリングポンテ痕の中には、その直径が2.6cmにもなる底部が存在する（図9）ため、遺跡ごとにポンテ竿の違いがあることも考えられ、類似資料のさらなる詳細な観察が必要である。

ポンテ竿を流用することは、職人が一人でガラス器製作を担っていた可能性があり、ポンテ痕の研究

が製造体制や技法の伝播についての解明につながると思われる。今回は時間的制約のため、ブハラ・オアシス出土のガラス底部をすべて観察することはできなかったが、今後は他の遺跡のガラス器底部を再確認し、イスラーム時代にガラス製造が発展していたエジプト・フスタート遺跡の遺物も比較資料として観察を行うことで、イスラーム時代におけるポンテ竿流用の地域的広がりについて考察を深めたい¹¹。

3. 今後の研究について

今回の調査では、ブハラ・オアシス遺跡だけでなく中央アジアでも主要な地域を巡り、ガラスの出土事例を収集できたことは大きな成果であった。ガラス遺物は報告書や論文で記述されているが写真や実測図が掲載されるものが少ないので、実際に目にすることでより詳細な情報を得ることができた。

今後の研究としては、ブハラ・オアシス遺跡の発掘調査に参加して出土事例を整理・蓄積するとともに、引き続き他地域で出土したガラス遺物のデータをより多く収集し、中央アジアにおけるガラスの共通性・地域性などを分析していくことを予定している。

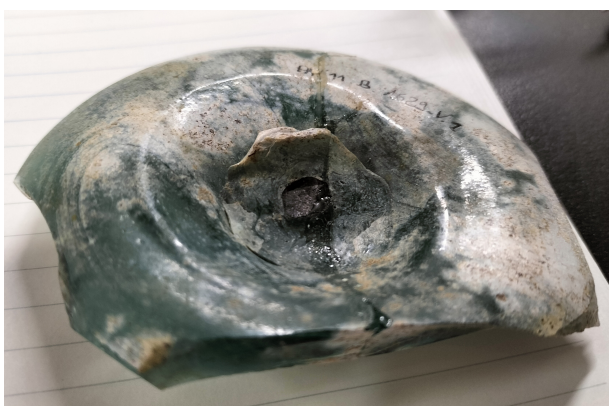


図9 パイケンド遺跡のリングポンテ痕（竹田撮影）

謝辞

複数年にわたる海外調査が実施できたのは、公益財団法人美術工芸振興佐藤基金の助成金によるものです。深く感謝申し上げます。また、遺跡から出土した貴重なガラス遺物の調査を快くご許可くださった、プハラ・オアシス考古調査団隊長ロッコ・ランテ博士ならびに日本・ウズベク共同調査隊隊長である国立民族学博物館准教授・寺村裕史氏に、厚く御礼申し上げます。さらに、情報の少ない中央アジアについて多方面からご教示くださった多くの皆様にも、心より感謝申し上げます。

註

- 1) ガラスについては、胴部の無装飾小片は考古学的な情報に乏しく、器形や年代などを推測することが困難である。そのため、図化できる破片および装飾が施された破片のみを登録し、これらの考古学的情報を用いて年代や製造地などを推定している。
- 2) Rante (ed.)2024. *The Oasis of Bukhara. Vol. 3: Material Culture, Socio-territorial Features, Archaeozoology and Archaeometry*. Brill: Leiden-Boston.
- 3) 出土事例：ペンジケント Aminov, F., 2020. Fig.3-1and 3-2, p.109; タラズ, Doshanova, T., 2009. Pic.1-2 and 3-4, pp.160-162; クヴァ, Mirzaakhmedov, D., 2011. Illust. XVI-1-4 and XVII-1-4, p.141 and Ivanov, G., 2003. Fig.8, p.212.
- 4) Mirzaakhmedov, D., 2011. pp.102-103.
- 5) 出土事例：クヴァ, Mirzaakhmedov, D., 2011. Illust. XVII 7, p.141; タラズ, Doshanova, T., 2009. Picture 3-13, p.162.
- 6) 寺村編 2026. p.24.
- 7) 古代オリエント博物館とウズベキスタン芸術アカデミー付属の芸術科学研究所によるダルヴェルジン・テパの発掘調査では、ほぼ完全なかた

ちをしたガラス瓶が出土している。胴部には人面が貼り付けられ、それを取り囲むように格子文を伴った帯状の紐装飾が施されている。田辺、堀 1999.

- 8) Foy, D., 2000. pp. 152-155, Hadad, S., 2005, p.28, Hadad, S., 2008. p.172.
- 8) 真道著、榊屋監修 2020. p.273.
- 10) 島田 2008. pp.30-34.
- 11) 2026 年 2 月に日本ガラス工芸学会主催の研究会においてガラス井戸端会議「ポンテのあれこれ」というテーマでリングポンテ痕の復元実験を実施した。実験の詳細と結果については別稿に譲りたい。

《参考文献》

- 島田守 2008「古代吹きガラスの実験考古学的研究」『文化財学報』26, 29-62
- 真道洋子著・榊屋友子監修 2020『イスラーム・ガラス』名古屋大学出版会
- 田辺勝美、堀 暁、石田恵子、津村眞輝子、山内和也、石渡美江、古庄浩明、川崎健三、近藤さおり、岩井俊平、ドミトリー・ルサーノフ 1999.「ダルヴェルジン・テパの発掘（1999 年度調査の概報）」Bulltin of the Ancient Orient Museum XX, pp.101-154
- 寺村裕史編・国立民族学博物館監修 2026『シルクロードの商人語りーサマルカンドの遺跡とユーラシア交流』
- Aminov F., 2020. “Pre-Mongolian Glass Articles from Penjikent and Its Suburbs” *Transaction of the Institute for the History of Material Culture RAS* 23, pp.103-118.
- Baypakov K. and Doshanova T., 2011. “Kazakhstan.” In: Baypakov, K., Pidayev, Sh. and Khakimov, A. (eds.), *The Artistic Culture of Central Asia and Azerbaijan in the 9th -15th Centuries*. Volume II Glass. SMI-Asia:

- Samarkand-Tashkent, pp.12-64.
- Doshanova T., 2009. "Kollektsiya steklyannikh izdeliy iz Yugo-Zapadnogo Semirechya gorodisha Taraza, Torkol i Merke" *Izvestiya Natsionalnoy AN Resp.* No.1, Kazakhstan, pp.157-164.
- Foy, D., 2000. "L'héritage antique et byzantin dans la verrerie islamique: exemples d'Istabl 'Antar-Fostat" *Annales Islamologiques* 34, pp. 151-178.
- Hadad, S., 2005. *Islamic Glass Vessels from the Hebrew University Excavations at Bet Shean*. Qedem Reports 8, Jerusalem.
- Hadad, S., 2008. "Chapter 5 Glass Vessels" In: Hirschfeld Y. and Gutfeld O.(eds.), *Tiberias: Excavations in the House of the Bronzes; Final Report I: Architecture, Stratigraphy and Small Finds*. Qedem 48, Jerusalem, pp.165-176.
- Hosokawa, T. 2022. "L'art du Verre." In R. Rante and Y. Lintz (eds.), *Splendeurs des oasis d'Ouzbékistan sur les routes caravanières d'Asie centrale*. Paris: Musée de Louvre, Madrid: Éditions El Viso.
- Ivanov G., 2003. "Excavation at Kuva (Fergana Valley, Uzbekistan)" *Iran*. Volume XLI, pp.205-216
- Mirzaakhmedov, D. K. 2011. "Uzbekistan." In K. Baypakov, S. Pidayev and A. Khakimov (eds.), *The Artistic Culture of Central Asia and Azerbaijan in the 9th -15th Centuries*, Vol. II, Glass. SMI-Asia: Samarkand-Tashkent.
- Shindo, Y., T. Hosokawa, T. Takeda, T. Shinmen and A. Endo 2024. "Glass in the Bukhara Oasis, Uzbekistan." In R. Rante (ed.), *The Oasis of Bukhara. Vol. 3: Material Culture, Socio-territorial Features, Archaeozoology and Archaeometry*. Brill: Leiden-Boston, pp.304-363.

A Report on the Investigation of Glass Artifacts Excavated from the Oasis of Bukhara

Tamako Takeda¹, Takako Hosokawa²

¹Yokohama Museum of EurAsian Cultures

²Tokyo Gakugei University

横浜ユーラシア文化館紀要 第13号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 13

2026年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
<https://eurasia.yokohama-history.org>
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 株式会社TAKT-JAPAN

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332

横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures